増刊・地域と協同の研究センターNEWS

２０１５年８月

地域と協同

第４号

発行：特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

特集

地域課題の解決に向けての新しい連携

≪ はじめに ≫ ……２
≪ 講　　演 ≫ よりよいくらしをつくる　地域のつながり ……３
≪ 地域の事例報告 と 事例報告について ≫
岐阜の事例
地域とともに生きるくらし ……１１
三河の事例
志多ら＆てほへが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦 ……１７
コープぎふの事例
八百津町久田見地区　買物支援の取り組み ……２３
尾張の事例
「大規模団地等における孤立防止推進事業」における
地域とコープあいちの連携……２８
三重の事例
みえ次世代ファーマーズ miel（ミエル） ……３３
≪ 編集後記 ≫ ……３９

特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター

はじめに

「地域と協同」第４号は、今年２月７日に開かれた第１１回東海交流フォーラム「よりよいくらしをつくる地域のつながり～新しい力とともに未来を探る～」の基調講演と５つの事例報告を紹介しています。

朝倉美江先生の**≪基調講演（ｐ3-10）≫**「よりよい”くらし”をつくる地域のつながり！」は、不寛容の時代の社会問題を取り上げ、背景にある金融資本主義の政治の歪みを指摘し、一方で共同体のもつ排他性にも注意を喚起しつつ、よりよいくらしと地域をつくるために、だれかとつながって希望を実現する行動をよびかけています。今の時代にふさわしいメッセージを味わっていただきたいと思います。

５つの**≪事例報告≫**は、東海交流フォーラムの報告の紹介です。

第一報告≪岐阜の事例報告（ｐ11）≫では、地域おこし協力隊に挑戦する３３歳の青年家族、第二報告≪三河の事例報告（ｐ17）≫では、和太鼓集団・志多らが地域への恩返しのためにつくったＮＰＯてほへ、第三報告≪コープぎふの事例報告（ｐ23）≫は、住民主体の買い物支援を支えるＪＡ職員とコープぎふの連携、第四報告≪尾張の事例報告（ｐ28）≫は、都市部の大規模団地でサロンと移動店舗を開始する区社協とコープあいち・団地自治会の連携、第五報告≪三重の事例報告（ｐ33）≫では、次世代ファーマーズmiel （ミエル）の若い農業者と消費者の相互理解を取り上げています。

地域の問題にむきあう人の生き方や価値観、そのつながりを読み取っていただきたい。加えて編集委員会では各事例の「その後」を取材し「新しいちから」の課題や特徴、可能性などを考察しました。

岐阜の事例報告について－「つながりづくりから仕事起こしへ」（ｐ15）
三河の事例報告について－「自然に包摂された音・物・人の絆」（ｐ21）
コープぎふの事例報告について－「地域における新しい協同のかたち」（ｐ26）
尾張の事例報告について－「新しい連携、その後」（ｐ31）
三重の事例報告について－「mielさんとの出会いに新たな陽射しが！」（ｐ36）

本号が、読者の皆さんとともに、よりよいくらしをつくる地域のつながりを育て励ます一助になれば幸いです。

≪基調講演≫

よりよい“くらし”をつくる 地域のつながり！

朝倉 美江
金城学院大学人間科学部教授・地域と協同の研究センター理事

はじめに

今日は「よりよいくらしをつくる　地域のつながり」というテーマで、くらし、生活は、今どうなっているのか、今求められている「つながり」とは何か、そして、その「つながり」にはどのような可能性があるのか、という話をさせていただきたいと思います。

具体的には、今の時代の社会状況と貧困・社会的排除の関係について、そしてその背景にある金融資本主義とアベノミクス、さらにその影響のもと私たちの生活を支える社会保障制度がどのように縮小され、不安定になりつつあるのか。そして、私たちの「くらし」とは何か、「つながり」という「協同」はどのようにつくられるのか。私たち自身はどうしたらいいのか、という話をさせていただき、後半の事例報告につなげていけたらと思っています。

１．広がる「不寛容時代」

このところ、残酷な事件やテロなどが各地で起きていて、私たちの社会はこの先どうなっていくのだろうかととても不安に思われます。

なかでもＩＳ（イスラム国）の問題は深刻ですが、人、もの、金が国境を越えるグローバリゼーションが進む中で、多くの問題が顕在化してきました。昨年のノーベル平和賞は、マララさんとサティヤルティさんの二人が、子どもの教育、児童労働問題に長年取り組まれたことが評価され受賞されました。なかでもマララさんの受賞は、イスラム過激派に襲撃されたにも関わらず決して屈しない彼女に、世界が今の状況を乗り越えていく可能性を期待したのではないかと思っています。今年１月にはフランスの風刺週刊紙「シャルリ・エブド」編集部襲撃事件が起こり、移民の排斥が世界的に広がりつつあります。グローバリゼーションが進展するなかでは、世界各地のいろんな問題がつながって私たちの身近な問題になるという状況が起きています。

新年の毎日新聞の特集「不寛容時代」で連載された事例をいくつか紹介させていただきます。

一つめの事例は「原発も安全と言われながら事故が起きた、精神障害者は本当に安全か」という声が大きくなり、精神障害者のグループホーム建設への住民の反対運動が過熱したというものです。なかでも女性医師が「精神障害者にも幸せなくらしをしてほしいが、まともに働いている人を阻害してはならない」と主張されたといいます。二つ目は、最近増加している非正規雇用とか、ブラック企業の中で過酷な状況の人たちがいることをわかっているが、見て見ぬふりをしてしまったという同僚の声が紹介されていました。三つ目は京都の朝鮮学校へのヘイトスピーチの事例のような排斥運動が各地にひろがっているという事例。四つ目の事例としては、妊婦さんが満員電車に乗っていると、おなかを蹴られ、「乗っているおまえが悪い」と言われた、ということが載っていました。

こうした事例を読むと、悲しくて、気持ちがふさぎます。しかし、みなさんも私自身も気づいていても気づかないふりをしたり、あまり関わりたくなくて、もしくは半ばあきらめた気持ちで見過

≪基調講演≫

ごしているこの事例のようなことが身近にあるのではないかと思います。

例えば沖縄の問題があります。今も沖縄の人たちはとてもシビアな環境のなかに置かれています。この問題も随分長く、私たちの社会で解決できていません。原発の立地の問題にもつながりますが、なぜ沖縄の人たちばかりが負担を押し付けられなければいけないのだろうか、私たちはそのことに対してどれほど真剣に向き合っているでしょうか。

２．「ゴミ屋敷」、介護殺人事件

また、私たちの身近で最近顕在化しつつある問題として「ゴミ屋敷」の問題があります。程度の差はあれどこにでもあります。これは買い物難民の問題ともつながります。ゴミ屋敷は、不衛生で迷惑ということではない、「買い物難民」は、買い物ができなくなって困っているという問題ではなく、いずれも社会的排除の問題です。

どういうことかというと、私たちは、人と人とがつながって当たり前の生活が営めます。人と人とのつながりがなくなったときに、どういう状況に陥るか。例えば誰かが自宅に来ると言えばいつも以上に掃除をします。もちろん、いつも完璧にきれいな家もあると思いますが、通常は、何か目的があって部屋をきれいにする、日々の生活の張りとつながっています。それが無くなってしまうと、誰とも会うわけではないのだからと掃除をしなくなります。最初はちょっと散らかってきたというくらいですが、だんだん、ゴミが増え、生きる意欲がなくなると部屋の汚さが気にならなくなり、そのプロセスの中でゴミ屋敷になるのです。

生活には継続性、慣性があります。突然「ゴミ屋敷」にはならない、突然、「買い物難民」にはなりません。郊外に大きな店ができ、近所に買い物をするところが無くなるといった不便の問題ではありません。何が問題かといいますと、買い物に行く意欲がなくなるのが問題なのです。たとえば、家族がいれば必ずご飯をつくります。しかしひとりになると適当になりがちで、食事が貧困になるといいます。食事は生きていくためには不可欠ですが、生きていく目的や張り合いがないなかでは十分に、適切な食事をとることは困難になります。元気でいたいとか、誰かとおしゃべりしながら楽しく食べるということがないと単に目の前に食べるものがあればいいということではありません。つまり食事や買い物の問題は、宅配すれば、ネットがあれば、スーパーが届ければいいという問題ではないということです。

ゴミ屋敷の中

次には家族の介護負担の問題についてお話します。岐阜県で、介護疲れで母親を殺したという事件がありました。初めて裁判員裁判になった介護殺人事件で、８３歳の母親を６１歳の息子が殺してしまったという事件でした。この息子は孝行息子でした。虐待の場合もそうですが、最初から殺そうとか虐待しようと思う家族はいません。一生懸命頑張って何とかしようとしますが、どうしても何ともならず、追い詰められて起きた事件です。事件前その息子が大変な状況だったことは、周りのケアマネージャーや介護専門職なども知っていました。そういう中で事件は起きてしまいました。その裁判に向けて被告の減刑を求める嘆願署名が7，600人分集められました。皆さんだったら、どうしますか、署名しますか。住民は何をしなければいけなかったでしょうか。住民はおそらく「孝行息子で偉いよね」と言っていたと思います。むしろ、その「偉いよね」ということが彼を追い詰めます。今の社会はそういう社会で、まだまだ古い価値観があり「家族ががんばって介護をするのはすばらしい」と言います。専門職もそう言います。せるからこういう事件が後を絶たない、お

そらく、今後も増えると思います。

裁判員の人たちも判断が難しかったと言っていますが、被告はこの息子だけなのか、本当に罰せられないといけないのは誰かということを考えないといけないと思います。サービスが足らない、つまり制度の問題も大きいでしょう。しかしその制度は誰がつくったのか。また地域で何かできなかったのか。今までの価値観ではなく、地域の中でお互いの大変さを理解し合い、お互いに支え合うという文化をつくる必要があると思います。

３．社会的排除と貧困の拡大

「ゴミ屋敷」「買い物難民」などの問題は社会的排除の問題だとお話しました。従来私たちの生活困難は貧困問題として捉えられていました。貧困とは、生存・生活ができないという経済的な問題でした。今の貧困問題は、経済的に貧しいだけでなく、それ以上に社会の中で誰にも声をかけられない、孤立してしまうという排除の問題として捉えられています。つまり自分の役割が、コミュニティの中にないという問題であり、このような問題は増えています。

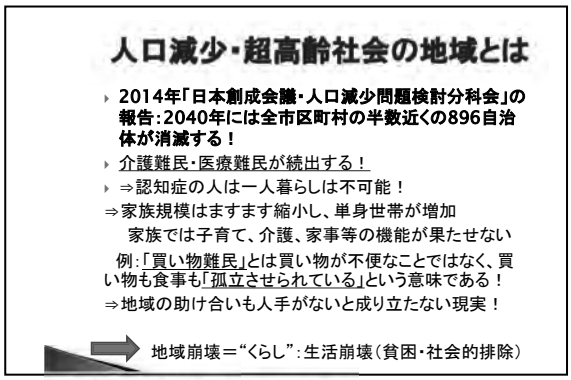
「孤独死」とは、一人で亡くなるということですが、私たちは誰もが一人で亡くなる可能性があります。一人暮らしでも家族がいても、誰にも共通する問題です。しかし「孤独死」ではなく、「孤立死」がなぜ問題になるのか、というと、亡くなる時に一人だったということだけでなく、おそらく死ぬ前もずっと誰も声をかけてくれなかったという状態であったことが問題なのです。亡くなった時だけたまたま誰もいなかったという、そういう問題ではないのです。ずっと、人間関係がない中で亡くなってしまった。亡くなる時まで誰とも関わらない、そういう孤立無援で社会的な役割がない人が増えています。自殺が多いことも深刻な問題ですが、そのなかには「孤立死」と同じ状況の問題も多いと言われています。

また、近年格差が問題になっています。今日の貧困は「相対的貧困」と言われ、貧困世帯とは平均的な世帯収入の半分以下の世帯をそのように定義しています。その割合が１６％で、子どものいる世帯では６人に１人が貧困だといいます。私の大学でも、突然親が失業したり、病気になったりして、学費を払えなくなる学生が増えています。子どもの貧困は貧困の再生産につながり、とても不平等な現実があり、日本はアメリカに次いで貧困大国だと言われています。

４．人口減少・超高齢社会の地域とは

さらに去年、増田レポート（注）と言われるショッキングなレポートが出されました。２０４０年に半分近くの自治体が消滅するというものです。その原因は、出産可能性のある女性の減少であり、その結果、東京一極集中が進むといわれました。青森などの東北、山陰などいろんな自治体が、ショックを受けています。地方だけでなく東京都内でも消滅する区があると言われました。つまりどの地域でもひとごとではない状況があり、当面する問題としては高齢者の医療や介護の問題が深刻です。これは社会保障制度改革とつながる問題ですが、愛知、岐阜、三重でも深刻になる大きな課題です。

（注：2014年5月に元総務相の増田寛也氏が座長を務める民間研究機関「日本創成会議」が公表した試算。）



若い人たちが結婚しないので、自治体は、若者の出会いの場をつくらないといけないと言っています。放置しておくと地域が消滅すると言います。実際は平成の大合併で行われたように消滅しそうな自治体はどこかに吸収され、「周辺化」するということになると思われます。そして、どんどん自治体のサービスが減少していくと思います。

以上のようになぜ少子化や人口減少が急速に進

≪基調講演≫

展したのでしょうか。一番大きな原因は、１９９５年に経団連が出したレポートで雇用の柔軟化がすすめられ、現在では労働者の約４割が非正規雇用になったことだと思います。働いてこそ生活が成り立つ、というのが資本主義社会ですが、その前提となる雇用が一気に不安定化してしまいました。そのことが一番大きな問題であり、なかでも若い人たちの層でシビアに顕在化し、少子化にもつながっていると思います。

５．社会保障制度と税の一体改革

さらに社会保障、社会福祉の予算が削減されています。この背景には「社会保障制度改革推進法」という法律があります。この法律は「自助、共助及び公助が最も適切に組み合わされるよう留意しつつ、国民が自立した生活を営むことができるよう、家族相互及び国民相互の助け合いの仕組みを通じてその実現を支援していくこと」という条文になっています。国の財源には限りがあるので地方でがんばりなさい、そして国民自身、国民同士の助け合いで、社会保障制度をつくっていってくださいということです。それ以前１９９５年の社会保障制度勧告の中で、従来の憲法２５条に基づいた社会保障、社会福祉は国が責任を持つということから、社会保障制度はみんなでみんなを支えましょうと大きく変わっていました。そして、さらにそれがシビアに変わったのが「社会保障制度改革推進法」だと思います。

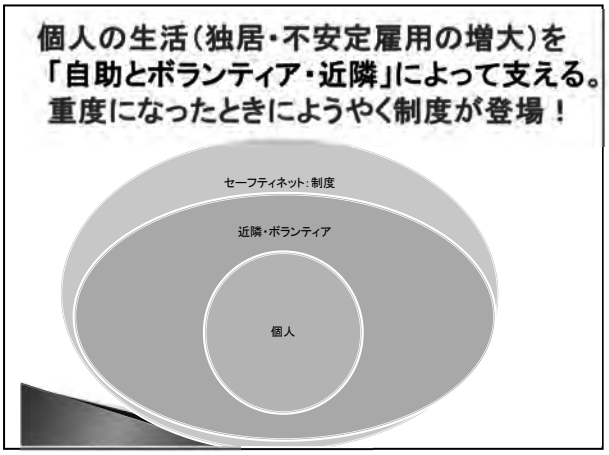
社会保障制度改革は税との一体改革として進められました。私たちは消費税が社会保障に生かされるのであればいいと思っていましたが、研究センターの学習会（２０１４年総会記念シンポジウム「消費税アップと私たちのくらし」）で学んだようにそうはなっていないということです。１９８９年に消費税は３％で導入され、その当初も「福祉目的税」と提起されていましたが、現実には３．４％しか社会保障費には使われませんでした。今回も１割しか使われていません。依然として国民が期待していることと国が実際に行っていることとは異なっています。期待しても私たちの思うような形で税金が使われていないのが大きな問題です。このことが政治不信になる大きな原因だと思います。

今後は、私たちの医療保険制度はさらに縮小していきます。公的な医療制度には限界があるから、病院に行くときには、各自がお金のことを意識し、支払い可能な範囲の医療を利用し、それ以外は、自己努力で、それが無理なときはお互いに助け合いなさいという「自助、互助総動員地域ケア」を国は提起しています。

６．地域包括ケアシステムとは

地域包括ケアシステムづくりは、厚労省が、国民に提起し、愛知県でも三重県でも岐阜県でも取り組んでいます。具体的には、自宅にいて、必要なときには医療や介護を利用できますが、できるだけ皆さん元気でいてください、ということです。それはとてもいいことなのですが、実際には高齢になると誰もが病気になったり、要介護状態になったりする可能性が高くなります。さらに認知症の方がどんどん増えて、軽度認知症を含めると６５歳以上の４人に１人が認知症の時代になっています。今後もっと増えていくわけです。認知症になった時には一人暮らしは不可能です。コミュニティの中にその人たちが暮らせるような場をどうつくっていくのか、が問題になります。

そのような政策下における私たちの将来は、今真剣に考えないとより一層厳しくなります。医療はどんどん縮小して、今まで以上に早く病院から出て行ってくださいという形になります。介護報酬は減ることが確実です。従来は医療や介護の専



門職が引き受けていたところまで全て地域で、みなさん自己努力で、助け合いでがんばってくださいという流れになっています。

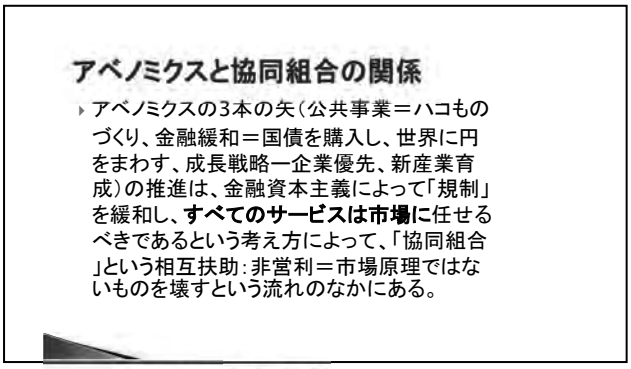
敗戦後、高度経済成長期を経て日本は、ヨーロッパの福祉国家に少し近づきました。当時は夫婦と子どもという核家族が標準的で安定しており、終身雇用で企業福祉が充実していました。そのような前提のもと万が一のときもセーフティネット（社会保障制度）がありました。しかし、現在は一人暮らしが多くなり、なかでも高齢単身者がどんどん増えています。そして、雇用はますます不安定化し､セーフティネットは縮小していきます。がんばれと言われているのは、近隣、ボランティア、ＮＰＯです。相当深刻な状態にならないと制度は助けてくれません。

地域包括ケアシステム研究会のレポートは、自助について丁寧に教えてくれています。「自助」とは、「単に、自分の身の回りのことを自分でするという意味だけでなく、地域の中で、その人らしい生活を継続するために、可能な限り自分のことを自分で決め、自ら健康づくりに励むといったセルフケア、自己管理に関する義務も含んでいます。自らの金銭的な負担によって一般的な市場サービスを購入することで自らの生活を支えるという側面もある」ということです。そのようなことを言われなくても、私たちは、できるだけ元気でいたいと思っています。政府は私たちに健康を維持する義務を課し、早めの住み替えで高齢者住宅等を購入し、必要なサービスも可能な限り自前でと薦めています。近年、規制緩和によって企業の介護サービスは増えていますが、なかには質が低く、悪質なところも増えており、虐待など深刻な問題が起きています。

７．金融資本主義とアベノミクス

以上のような社会保障制度の改悪の背景には金融資本主義の推進があります。堤未果さんが書かれた『沈みゆく大国　アメリカ』は、ぜひ読んで頂きたい本の一つです。オバマ大統領がつくった医療保険は、アメリカでも非難されていますが、実際は製薬会社が牛耳っていて、必要な医療が必要な人に提供されないという状況にあるといいます｡アメリカとブラジルの仕組みは近いのですが、ブラジルに行った時にブラジルの医療制度がいかに深刻かを実感させられました。ブラジルもアメリカも相当高い保険に入っていないと適切な医療は受けられません。例えば高度なガン治療は自己負担、安楽死は保険適用など相当シビアな事態があるといいます。お医者さんの自殺率がアメリカではとても高いともいわれています。医療がビジネスになっているということだと思います。

日本でもアベノミクスの３本の矢として金融資本主義が推進され、規制緩和が行われています。この中の成長戦略には、女性の就労・活躍推進がありますが、女性も男性と同じように働くということです。女性が働きやすいように女性のために保育をというようにジェンダーの問題はそのままという政策です。建設業、介護の分野での「外国人研修生制度」の導入も具体化されつつありますが、現代の奴隷制度と批判されているものが、改善されないまま活用されようとしています。また医療の分野では、混合診療も着々と進められています。



当面している大きな課題として、ＴＰＰ交渉のなかで農協改革も推進されつつあります。このなかで生産調整機能をもっている農協は必要ないと言われています。これも市場主義で農業もやろうということだと思います。１９世紀にトクビィルが「アメリカには農民はいない、経営者だけだ」と言っていますが、まさに日本も今そうなりつつあると思います。

そういう状況の中で浜矩子先生（同志社大学・

≪基調講演≫

経済学者）が「日本は成熟経済だ、今必要なのは、わかちあいの論理だ」と言っています。つまり、助け合いの論理です。さらに「政策は強きものをより強くするのではなく、弱い人たちの権利を守っていくことが本源的な原理だ」と言われています。最近話題になったピケティも、「今は富む人がどんどん富んでいく」と言っています。対応策として、累進課税を強化していくことを世界規模でと言っています。それを現実的なところからやらないといけないのではないかと思います。

８．よりよい“くらし”と幸せ

私たちの“くらし”、生活というのは、まず、いのちです。いのち、健康ということ、そして、日々の、日常生活という意味があります。さらに一生、その人の人生です。それらを含めて生活と言います。

また人口減少社会では、人口が問題になっていますが、神野直彦先生は「人間が人口になったとたん、人間は人間でなく、目的になってしまい、稼いでくる人たちとなる」と指摘されています。つまり人口が減ると経済的な豊かさを得られなくなるから問題だとなっている。しかし、私たちは人口を増やして豊かになることをめざして生きているのでしょうか。

私たちはどのような生活をするためにどのような社会をつくればいいのでしょうか？社会福祉とは、ソーシャル ウエルフェア(Social Welfare)のことであり、イギリスで「ゆりかごから墓場まで」といわれているように人間らしい生活ができる社会をつくるために誕生した社会制度です。社会福祉が誕生する前は、エリザベス救貧法があり、当時貧困はその人が怠惰であることが原因であり、自己責任であると考えられていました。

しかし、戦後誕生した社会福祉は、貧困の原因は本人にあるのではない、貧困は社会的な問題であるという認識のもとにすべての人に生きる権利があり、それを社会で支えていこうという制度です。つまり貧困は、社会構造の中で生まれてくるものであり、人は失業したり、病気になったり、年をとれば働けなくなります。だからこそ、社会の中で人は助け合って生き、よりよいくらしを支えるために福祉国家をつくってきました。

福祉とは一般的には幸せを意味します。中国では、天寿を全うして喜びにあずかることという意味だと言われています。日本では、敗戦で多くのものをなくし、平和が大切で、一人ひとりの命とくらしを守ることが何より重要であると国民が認識し、憲法２５条で「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定めました。さらに言えば、憲法はＧＨＱが作ったと言われますが、この条文は日本人が提案して、国会の中で、最低限度の生活は権利だと主張してつくられたものです。

また、スウエーデンでは、福祉は「悲しみのわかちあい」と言われていると神野先生が紹介されていますが、悲しみをわかちあうことによって、みんなが幸せになるという考え方です。

ＧＤＰを上げようとする政策がアベノミクスですが、１９６０年代にケネディは、当時はＧＮＰと言われましたが、それには「何が含まれていないかと言ったら、戦争で使われる武器は含まれているが、子どもたちの健康や人々の思いはＧＮＰには含まれていない」とスピーチしています。

世界一幸福な国はデンマークだと言われています。税負担が重いという批判もありますが、何かあったときには支え合うというしくみをつくっています。人口が減少し、経済成長ができなくなるから子どもを産まなくちゃではなく、すべての国民の生活が安定し、経済格差も少ない。医療費もほとんどかからず、大学まで無料で、チャンスが平等に与えられる。そういう国だからこそ子どもも生まれ、高齢になっても安心で、平和が続いているからこそ幸せであるということだと思います。

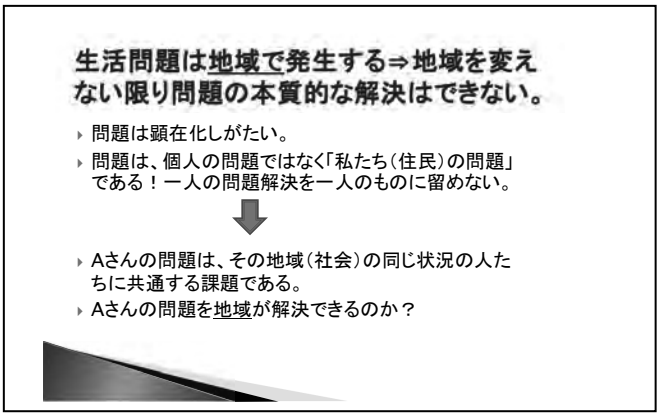
ブータンもよく紹介されますが、国民総幸福という指標で国政をすすめています。ブータン２０２０ビジョンという国家ビジョンがつくられ「幸福を可能にする自然環境、精神的な文明、文化伝統、歴史遺産などを破壊し、その上家族や、友人、地域社会の絆までをも犠牲にするような経済成長

は人間が住む国の成長ではない！」と明確に示しています。このような国のあり方もあるということも私たちは学ぶ必要があります。

９．よりよい“くらし”と地域

よりよい“くらし”というのは、誰かに委ねるのではなく、自分たちで、地域づくりとして創造していくものではないかと思います。

「ゴミ屋敷」、介護殺人、虐待の問題もなぜそうなったのか、その原因を考えていく必要があるのではないでしょうか。すべての問題は必ず地域で発生しています。地域の中に生活問題が発生する要因があります。例えば認知症の方が行方不明になるということは自分がそうなったとき、声をかけてもらえない地域を私たち自身が作っているんだと、考えていく必要があります。



協同組合を日本に紹介した賀川豊彦もメンバーの幸せでなく、すべての人の幸せを考えないと、私たちが幸せな社会はつくれないと主張しています。協同組合でも、どんな組織でもそうですが、経済的なことも大切ですが、それだけでなく、その活動や事業が人びとの幸せとどうつながるのか、を考えていかないといけないと思います。

現在は不平等で格差が広がっています。しかしすべての人にとって平等に与えられているのは時間です。どんなお金持ちも、１年３６５日、１日２４時間です。その時間をどう過ごすかが生活の豊かさにつながると思います。私たちは、どのように生きていきたいのか。今どのような問題があるのか。その問題をどのように解決するのか。

現在深刻なのは、格差の拡大、不平等の問題です。その背景には社会的排除の問題があります。この問題は豊かになれば解決するわけではないことを認識する必要があります。社会のなかにすべての人びとの居場所があり、その人が生き甲斐、役割、尊厳をもって生きられることが重要です。

私たちは協同組合のメンバーとして、利益をだすことだけではなく、平等で公正な地域社会、そして、人びとがつながり、助け合える地域社会をつくることに挑戦しませんか、と言いたいと思います。

１０．共同性が持つ排他性

私たちのくらしの基盤である地域社会には、地理的・空間的な地域性という意味と、人と人との関係という共同性という二つの意味があります。共同性には、同一性が含まれ、同じことに関心があったり、同じ性や同じ世代、同じ文化の人等とつながりがちです。その一方、そのことが異なる人を排除してしまう。一つの価値観にしばられるとあるメンバーにとっては、それは大事なことかもしれませんが、そうではない人を排除することになってしまう傾向があります。

例えば地域の見守りが各地で取り組まれています。子どもの事件があると、子どもたちの親や高齢者が登下校等を見守っています。それはすばらしいと思います。しかし、本当にそうでしょうか。見守っているのは、子どもが安全に、または認知症の人が迷子にならないようにとのやさしい思いです。しかしその一方で、ホームレスや「外国人」はうさんくさい、と排除の目をもってしまう。そこが共同性のこわいところです。その人のことを理解しようとしないからです。「不寛容な社会」は「監視社会」です。一声かけるのではなく、町中に監視カメラが増え、私たちはその下で暮らしています。

地域の中にはいろんな人がいて、多様な考え方、価値観、文化があることをお互いに理解しあえる共生の考え方が重要です。

≪基調講演≫

１１．新しい力は、あなたの中に！

社会的排除の問題が顕在化し、不寛容な社会になりつつある今、自己実現ではなく「地球実現」という生き方が求められていると思います。グローバリゼーションが進展しつつある現在、多様な人びとが地域で生活しています。豊かな人がいれば貧しい人もいる、また世界には今なお戦時下で暮らさざるを得ない人もいます。そういう社会の中で私たちは何ができるのか。自己実現とは私が私らしく生きることだと言いますが、まわりの人もその人らしく生きられないと、私だけでは私らしく生きることはできません。自分だけがお金持ちになり、自分の才能を生かすということだけでなく、自分以外の人びとも豊かになり、自分の才能をコミュニティの中で生かしていくという生き方が「地球実現」です。このような生き方ができたら素敵だと思います。

最初に紹介した、マララさんの「からっぽの教室、失われた子ども時代、無駄にされた可能性も―略―『最後』にすることを決めた最初の世代になりましょう」というメッセージは、武器ではなくペンを、すべての子どもたちに教育を、ということを伝えています。彼女の目標はみんなの幸せです。そしてそのために行動を起こしているということが素晴らしいと思います。

私がいつも学生たちに紹介している『ペイフォワード』という映画があるのですが、その中で世界を変えるために主人公の少年が考えた方法がペイフォワードシステムとして世界に広がっています。それは「自分が親切にされたとき、話を聞いてもらったり、忘れものをして貸してもらったりなどしたとき、その相手にではなく、別の人に親切にする、それを３人にやったらどんどんそれが広がる。次の人に『渡して』いく、という方法です」同じようなことで最近流行っているのは「保留コーヒー」です。それは、もういっぱい余分にお金をだして、誰かのためのコーヒーを取っておいてくださいという行動です。

また、東日本大震災が発生してもうすぐ４年になりますが、阪神淡路大震災の被災者の加藤りつこさんは毎年被災地に通っていらっしゃいます。彼女は息子さんを亡くされるなど大きな悲しみを体験されました。そういう経験をしたからこそ今私にできることをやりたいと話されています。悲しみのわかちあいということだと思いますが、彼女は自分が被災地に行って、誰かの役に立つということがわかって、自分の役割がみえたと語っています。そのようなわかちあいの活動が大切だと思います。

最後に

社会福祉はイギリスで誕生しましたが、第二次世界大戦後に平和で人権が尊重される世界をつくるためにベヴァリッジが福祉国家を提起しました。彼は、貧困は自己責任だとされていたエリザベス救貧法の時代に、貧困は社会問題であると認識し、ロンドンの貧困地域に住みこんで、子どもたちと一緒に遊び、労働者と勉強し、彼らの権利を守り、社会を改良しようというセツルメント活動を行っていました。ロンドンに最初にできたセツルメントがトインビーホールですが、それを設立したバーネットは、「人のつながりが社会を変革する」と言っています。

また希望学という研究がありますが、その中で最近は希望がない人が増えていることが指摘されています。しかし、よりよい“くらし”をつくるためには希望が必要です。そして希望とは社会的なものであり、他の誰かと希望を共有し、他者と共有する何かを一緒に行動して実現しようとすることだということです。

私もよりよいくらしができる地域をつくるという希望を実現するために皆さんや多くの方々と一緒につながって、地域づくりの活動をしていきたいと思います。ありがとうございました。

≪岐阜地域の事例報告≫

地域とともにいきるくらし

中村 大祐
山県市 地域おこし協力隊

こんにちは。ここから大体、車で１時間少し、下道だと２時間の岐阜県山県市からきました。地域おこし協力隊の活動をしている中村と申します。

１年４ヶ月前に、田舎に定住して、地域おこし協力隊の仕事をさせていただいておりまして取り組んでいること、取り組んでいこうとしていること、どのような考えで田舎に引っ込むことになったかのお話をしたいと思います。

１９８２年生まれの現在３３歳になります。１０円玉の裏や１万円札にのっている鳳凰のある平等院のある京都府宇治市で生まれました。子どもの時から体が大きく、食べることが好きで、好きが高じて料理人になりたく、調理系の専門学校を出て飲食業に従事しておりました。辞めたあとも素材に興味をもち、農業、漁業の経験もしています。夏は北海道に漁師の仕事の手伝い、冬は沖縄でさとうきびから黒糖をつくる仕事の手伝い、地元でお茶を摘む仕事のお手伝いをしました。結婚を機に移住し、集落にとっては平成になって初めてと言われた子供を授かりました。子育てをしながら田舎で生活をしております。趣味は国内外の旅行です。

なぜ田舎に引っ越す気持ちを持ったか、もともと飲食業で働いているとき、インド料理屋で働いた経験がありました。現地に行って物を食べてみたり、いろんなものを見てみたいと思いインドへ行きました。自分探しの旅と言われますが、自分自身も、その当時もっていた価値観がインドを経験することで少々変わってきました。その価値観の変化が今の田舎くらしに変わってきたと思います。

どのように価値観が変わったか。山奥に温泉がわいていると聞きまして、バスで１日かけて、そこからトラックで半日、歩いて半日行ったところに小さな温泉のある村がありました。そこにたどりつくと、馬、牛がいて、鶏が走っている。そこであった子供たちの笑顔がすばらしい。そこの住人もフレンドリーで､やさしく接してくれました。その様な辺境の場所なので、物もお金もなく裕福ではない生活環境でしたが、子どもたちの笑顔が忘れられない。日本では欲しいものが簡単に手に入り、生活するのに困ることはない。公園の片隅で数人が集まってボール遊びもできずゲームをしている日本の子どもと比べてしまうと、笑顔のすばらしいインドの子どもとどちらが幸せかを考えるようになりました。

インドの北のほうに行ったときは、荒涼とした大地が続き砂漠のような場所がありました。そこは雨も少ない上に、小さな家で食べる分くらいの小さな畑しかなく、水も少ないので出来る野菜も小さいのですが、少ないながらも自然の恵みを大切にしながら丁寧にいただく食事を一緒に経験させていただきました。日本では、極度に安全性を重視して賞味期限が１時間過ぎただけで、廃棄されるコンビニの弁当があふれているのですが、これと比べるとはたしてどちらが豊かなのかを考えるきっかけになりました。

≪岐阜地域の事例報告≫

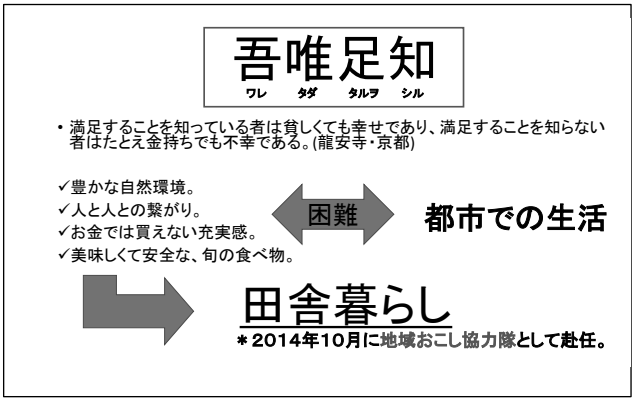
バラナシというインドのヒンズー教の宗教上の聖地とされている場所、ここで死を迎えると最高の死を迎えるという町があります。今の良い人生を送ると次の人生はさらに良い人生が待っているという考えがあります。死んだ後のことを考える、常に死と隣り合わせの生活だから、生に感謝する暮らしもありました。本当の幸せは何かを考えるきっかけとなりました。

そして、３．１１東日本大震災がありました。この震災を経て旧来の価値観が壊れて違う価値観が増えていると思います。

自分自身も思う事があります。電気にあふれたくらしは多大な危険性の上で成り立っています。もともと自分自身も環境問題には関心があり、山口県の上関（かみのせき）原子力発電所（現在計画中）を震災が起きる前に訪れました。賛成、反対で仲良かった人たちが分断されたと聞きました。そこを訪れた際に、電気が過剰にあふれた生活は、こうした地域の分断、放射能汚染の危険性の上で成り立ってることを感じました。食品の安全は判断できるかどうか、例えば水でも、いまの東京ででている水は何ミリシーベルトかわかりませんが、乳幼児が飲んでもいいと言われている水は、震災前の原発から出る排水の基準値よりも高くなっています。いま決められている野菜などの放射能物質の基準値が安全かどうかわからないですが、こうした事が価値観の変化につながっています。

絆、人と人との関係を感じることがあります。たすけあいを目の当たりにしました。いろいろ考えると、絆と呼ばれる日本人しか持ち得ない、山間部の「結（ゆい）」という集合体、助け合いの形があります。これは、培われてきた日本人のＤＮＡにすりこまれているんだと思います。

実際にどのような価値観に変化したかといいますと、自分自身が幸せを考える上でも一つのキーワードになっていますが、「吾唯足知」（ワレタダタルヲシル）」です。簡単に言いますと「満足することを知っているものは幸せであり、満足することを知らない人は金持ちでも幸せではない。」京都の龍安寺のつくばい（日本庭園の添景物の一つで露地（茶庭）に設置される）にかかれた仏法用語になります。世界で一番貧乏といわれている国のウルグアイ大統領は、月１０万円ほどの給料で、自己資産は小さな小屋とおんぼろのフォルクスワーゲンだけだそうです。彼は貧乏な人とは、少ししかものを持たない人ではなく無限の欲があり満足しない人だ、と同じようなことを言っています。裕福とはいえない場所に行って感じたことは、自分自身が満ち足りているということを感じていることが一番の裕福ではないかという思いです。



その様なことが感じられるところとはどういうところだろう、豊かな自然環境があり、人と人のつながりが濃密な場所、お金では買えない充実感が感じられる場所、旬でおいしい食べ物が満ち足りる場所、満ち足りていることを感じる場所だと思います。都市の生活では難しいと思って、２０１４年地域おこし協力隊で山県市の田舎に移住しました。

地域おこし協力隊は、総務省の事業ですが、簡単に言うと田舎に移住したい方と田舎に来てほしい自治体とをマッチングして、最長３年間その自治体に住みながら、地域住民のニーズにこたえながら、地域の力を維持強化することを目的にしています。現在、千人ほどが全国で活躍しておりまして、今後数年で３千人規模に増やしていこうというのが総務省のねらいであるようです。

≪岐阜地域の事例報告≫

今、私が地域おこし協力隊として活動しているのが岐阜県山県市北山地区です。岐阜市の北側、旧美山町の最北部に北山地区があります。豊かな自然があり青く澄んだ川（神崎川）が流れています。伏流水の湧き水があり、エメラルドグリーンの川です。農地は少なく、林業で栄えた地域ですが、現在衰退しています。２０１４年は２７３人の住人が住んでおりまして、高齢化率６４．１％です。８９６自治体消滅といわれていますが、あれは市町村、そのリストには載っていなかったのですが、今後１０年後２０年後には１つか２つの集落はなくなっていくと思います。２０１３年３０７人の住民が住んでいて、１年間で３０人くらい減っています。約１割の方がいなくなっています。このペースで考えると今年度末には２５０人をきります。山県市の岐阜市に近い、市の中心部の方は若い人が住むようになり増えています。中心部と北部との高齢化率の格差が起きています。

どのような活動をしているかといいますと、農家レストランのサポート、ゲストハウス設立、イベント開催受け入れをしています。農家レストランは、集落支援員の山口が立ち上げ準備をしていて、自分が着任する際に旧北山小学校のランチルームに地元のおばあちゃんたちが中心になりオープンしました。そこでは雑誌に載ったときは８０人ほど１日に来ていただき､にぎわいがあります。都市部の方たちに北山の郷土食を提供して、地元の憩いの場にもなっています。最高齢の方が８０何歳で現役バリバリで、平均年齢も７０何歳で、そういう方たちの新たな生き甲斐になっています。地域の２０代女性がイベントで興味を持ちボランティアで運営にたずさわっていましたが、いま正式なスタッフとして、おばあちゃんたちから料理の作り方を教えてもらい、郷土食の継承につながっています｡現在従業員の自主運営に移行中です。

農家レストラン『船伏の里へ　おんせぇよぉ～』のサポート業務。

- 2013年10月に北山交流センター(旧北山小学校)のランチルームに地元のお婆ちゃんが中心になりレストランをOPEN。
- 都市部の方達に北山の郷土食を提供。
- 地元の方達の憩いの場。
- 高齢の従業員(最高齢85歳、平均年齢70歳？)にとっての新たな生き甲斐に。
- 地域の20代女性の参加。郷土食の継承。

＊現在、従業員による自主運営に移行中。

今年度から活動しているのは、古民家ゲストハウスです。周辺には北山交流センターやグリーンプラザ美山などがありますが、２、３人で利用するには規模が大きかったり、金額が高いので、昔の旅館をつかってゲストハウスに改修作業中です。このゲストハウスを使ってどのような活動をするかといいますと、移住定住促進、集落維持活動、観光ＰＲ・イベント充実、環境保護啓発の４つでテーマに運営できればと思っています。集落維持活動というのは集落清掃、高齢者の買い物サポート、田畑の整備の手伝い、こういった活動をしていただいた方には一泊３０００円のところ、１５００円で泊まっていただく。移住定住促進では、実際に空き家を探す、お試し体験移住で使ってもらい半額で泊まってもらいます。観光ＰＲ、イベントの充実は釣り客などに使ってもらえればと思います。良い環境の中ですごしていただいて環境保護につながるかなと思っています。

各種イベントの開催も行ってきています。米づくり、野菜づくり、薪をつかった生活も田舎に来て経験しました。

地域活性化とは、田舎には、地域では当たり前の様々な知恵が眠っていますが、それを資源ととらえて、私たちが再パッケージして都市部の人に受け入れられるようにする事。地域の魅力の向上と自信回復、新たなビジネスの可能性、移住者の

≪岐阜地域の事例報告≫

地域活性化とは？

田舎には様々な知恵や技術、環境＝資源が眠っているが、地域にとっては当たり前の事なので活用できていない。それらを都市部の人に受け入れられる形に再パッケージング。

効果

- 地域の魅力の向上と自信回復。
- 新たなビジネスの可能性。 (例：徳島県上勝町　葉っぱビジネス)
- 移住者の増加。 (例：島根県海士町　人口の1割は移住者)

増加につながるかなと思います。自分も定住して地域の人たちが問題にしていたことが自分自身の問題になったので、いろいろな方法で取り組んでいるところです。地域の方たちといろんなことをして、学びながら、自分自身の価値観でそれを都市部の人に伝え表現しつつ地域と共に生きていけたらと思っています。

地域と共に生きると言う事

地域の人達が生活しやすい環境。

‖

自分自身にとっても生活しやすい環境。

- 地域にとっての課題は、自分自身の生活課題であり
  地域の可能性は、自分自身の可能性である。
- 様々な物事を学び、自分自身の価値観で表現しながら、
  地域と共に生きていければと思います。

農家レストラン「舟伏の里へ　おんせぇよぉー」の花かご

≪岐阜の事例報告について≫

中村さんを訪問して

つながりづくりから仕事起こしへ

岐阜地域・編集委員　熊﨑辰広

中村さんに初めてお会いしたのは、岐阜地域懇談会の企画（第５回岐阜のつどい）として、山県市の北山レストランを訪問した２０１３年の１１月でした。当時はまだ、地域おこし協力隊（以下、協力隊）として着任されたばかりで、北山レストラン（農家レストラン「舟伏の里へ おんせぇよぉー」）のメニュー作りなどに参加されている状況でした。

それから、２年ほど経過し、今回市役所の美山支所にて、東海交流フォーラムでの報告とその後の経過などを聞くことができました。その場には、着任して１年ほどになる協力隊のＳさん（２４才、女性）も同席されました。山県市では、新たに７人（１年前に６人、今年から１人）の方が協力隊として採用されています。それぞれ担当の地域があり、地域ごとに独自の活動が生まれています。Ｓさんは主に、６０歳後半から８０歳の方に「聞き取り」をすすめ、その内容を小学校で報告するといった活動や、棚田の復活などのプロジェクトに参加しています。山県市では定住を目標に、仕事づくりを重点的に進めています。地域の要望にこたえての仕事づくりではなく、むしろ、それぞれ各自でやりたい仕事を見出していくことが、まず求められているようです。

地域おこし協力隊とは？

・地域おこし協力隊は、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、地方への移住を希望する都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とする取組です。

具体的には、地方自治体が都市住民を受入れ、地域おこし協力隊員として委嘱し、一定期間以上、農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などの各種の地域協力活動に従事していただきながら、当該地域への定住・定着を図っていくものです。

現在約1,000人程の隊員が全国の市町村で活動中。

定住を求めて

「この２年間の活動のなかに、なにか意識の変化はありますか」という問いに対しての中村さんは「変化はあります。以前のようにがむしゃらに地域のために頑張る、ということはなくなった。まず、住むところがあり、その生活を続けることで、やれることをやろうというふうになった。」さらに、「ここに定住する思いはありますか」という問いには「あります。ただ、子供が生まれ、子育ての上では、学校の問題など困難な状況もありますが、今の暮らしに満足しています。」ということでした。フォーラムでの報告にもあるように、中村さんの守備範囲はかなり広がっています。「移住定住促進、集落維持活動、観光ＰＲ・イベント充実、環境保護啓発」という４つのテーマで、中村さんのやりたい仕事は増えているようです。すでに北山レストランとのかかわりはなくなっていますが、空家バンク、古い旅館を利用したゲスト・ハウス運営、農家レストラン、さらに祭りなどの継承サポートの活動など、それが無理をして頑張っているというのでなく、自然体の形で活動が維持されていることで、持続性が保証されているように感じました。

生き方の選択として

Ｓさんも含めて、ここに住み続けることで、「都会の人混みに圧迫を感じ、実際に人に会う以外には、行きたいと思うところはない。」ということでした。中村さんの報告のなかにあるように、「豊かな自然環境があり、人と人とのつながりが濃密な場所、お金では買えない充実感が感じられる場所、満ち足りていることを感じられる場所」とし

≪岐阜の事例報告について≫

ての田舎の選択でした。中村さんも、Ｓさんも海外での生活の経験があり、またＳさんは名古屋の大学では国際文化学科で学び､離島での生活とか、そのような幅広い経験の上で、現在の生き方を選択されているようです。彼女は「今は仕事さがしというモチベーションではなく、居場所づくりということで、いろんな所に顔をだして、できる所でお手伝いしようと思う。それで、自分がいざというときに力をかしてもらえる。つながり作りに努めている。」というスタンスでした。Ｓさんは岐阜市の出身ですが、こちらに一人で住んでいます。

その意味で、協力隊として働くという選択は、単に一つの職業の選択以上に強い生き方、価値観の選択であるように感じました。だから、彼らのいくらかは楽天的に見える展望についても、なんとかなる、といった自信が伝わってきます。彼は「必ずしも自分たちで仕事を作る必要はなく、ほんとに地域に根づいた貢献している活動をすすめれば、地域のほうから必ず仕事が紹介してもらえる、という話もよく聞く」と言っています。

でっかい外車から軽トラックへ

面白いエピソードがあります。協力隊の一人、まだ２５才の青年ですが、こちらに着任する際、大きな外車に乗って、いかにも街の子という感じの若者がやってきたのですが、協力隊の活動をするなかで、ここの生活に「嵌ってしまい」、夏は川の漁師として、冬には山にはいっての猟師として生活するなかで、獲れたものを販売するといった展望がうまれ、乗ってきた外車はいつしか軽トラックに変わったそうです。彼もまた、価値観を変え、生き方を変えて、田舎の生活を選択したようです。田舎の自然や風土のなかに、そのような力がまだ残っているようです。

また、山県市の無形文化財を対象に、「継承サポート」として協力隊の方が参加しています。例えば、「雨乞太鼓」など、これには集落支援員の横山さんなども参加しています。そのような地域の歴史や文化にかかわることで、また地域への愛着と定住意識をいっそう強めているようです。

当日は、協力隊の受け入れなどを統括されている、美山支所の副支所長さんのお話も聞くことができました。現状では、各協力隊の方に、特に具体的な仕事の要請などはせず、各自自由に地域になかで活動をすすめてもらう、という方針で、いくらかでも定住してもらえるよう、空家などを利用しての、住む場所の提供は検討しているということでした。

岐阜地域懇談会　第5回岐阜のつどいでの交流の様子

≪三河地域の事例報告≫

志多ら＆てほへが受け継ぐ 地域文化と新たな地域創造への挑戦

大脇 聡

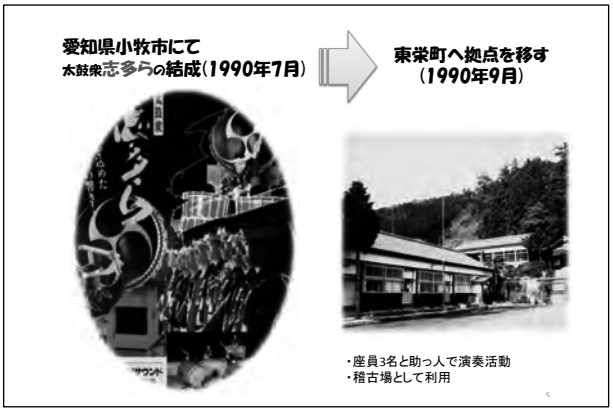
ＮＰＯ法人「てほへ」副理事長

こんにちは。「志多ら」＆「ＮＰＯ法人てほへ」の大脇です。なるべく今日のテーマに沿ってお話を進めたいと思います。よろしくお願いします。

私は大脇聡です。一緒に来た小林は私の妻です。夫婦で志多らのメンバーとしてやっていましたが、今私はプロデューサー、妻は事務局スタッフをやっています。高校２年生と小学校２年生の息子２人がいます。東栄町にくらしながら活動しています。ご存じの方、手をあげてください。ありがとうございます。コープさんや皆さんに支援してもらいながら活動している、プロの和太鼓集団です。

プロの和太鼓集団が、なぜ「てほへ」を立ち上げたか、について話をしたいと思います。東栄町ご存じですか。

東栄町というと、どこにでも「○○市東栄町」というのがありそうですが、愛知県北設楽郡東栄町という場所です。愛知県のいちばん静岡、長野よりのはしっこになります。愛知県は、経済力は西の方が高いといわれていますが、山の高さでは、地理的に言うと東の方が高く、ほとんど山しかない、自然しかない場所から今日降りてきました。そんな場所で活動しています。「志多ら」は今、北設に拠点を構えていますが、もともとは愛知県小牧市で、「志多ら」というプロの和太鼓集団のグループができました。プロというのは、朝から晩まで太鼓をたたくわけです。結成してすぐ、町の中だとうるさいと言われて練習する場所がなくなりました。どこか場所がないかと探していたら、たまたまご縁があって、東栄町の廃校になった学校を使わないかと言われ、使うようになりました。平成元年からこの学校を借りています。グループは結成２６～７年になります。ほぼ東栄町で活動してきました。



私たちは結成してプロでやっていくこととなり（バブルがはじけた頃に結成）、食べていかないといけないので、熱海の大きなホテルで毎晩外国人の歌手が歌い、それに合わせて太鼓をたたいていました。バブリーな世界でした。食べていくために営業をしました。東栄町の廃校を借りながら、営業しなければならないので住み込みで一年間営業しました。こういう芸能活動でいいのかというメンバーと、ラスベガスをめざすメンバーに分かれることになり、今は、どちらもめざした方向で両方、日本で有名なチームになりました。それぞ

≪三河地域の事例報告≫

れ目指した道へ行って目指したとおりの活動をしています。我々「志多ら」は、東栄町の廃校の学校にしっかり拠点をはって、根っこを持った音楽でないと心に伝わる音楽はつくれないんじゃないか。創造の世界だけ、舞台だけの世界だけでなく、芸能は、くらしにしっかり根付いていないとだめという思いで、もう一度「志多ら」の活動を見直し、ここを拠点にしながら活動を始めました。そういう音楽づくりをしようとして残ったのが「志多ら」です。私は、その方針が出て東栄町に戻ったときまだ大学生だったのですが、そういう「ゼロ」になった「志多ら」に興味があり、まだ大学１年生で３年たつと基礎ができちゃうので大学をやめて「志多ら」に飛び込みました。ほぼ仕事も無い状態になり、親にも大反対されましたが、今は理解してもらっています。

志多らのキャッチコピーは「人を結び、命かなでて、伝統を舞う」です。こういうテーマで音楽づくりをしていますが、日常生活は音楽家なのにほぼアスリートです。山の中、朝から起伏の多いところで２０ｋｍ走ります。筋トレもします、食事当番もあるので、ご飯も作れるようになります。そんな生活をしながら、太鼓に打ち込める環境がある中で音楽活動をしています。ですが、田舎にくらしていると太鼓ばかりたたいてはいられません。音楽家の方が、芸術活動は田舎の方が、環境がいいといってけっこう行きますが、それは地域に根付いたというのでなく、田舎を使っているだけだと思っています。私たちは、地域のくらしや活動の中に飛び込んで行きました。最初に何をしたかというと、ランニングで毎朝走っていると、朝のあいさつをします。日頃の会話や、ゲートボールをやっているときに会話をします。地域の道づくりがあるので、メンバーはそのときは仕事がなかったのですが、仕事は入れずにやっていると言って参加して、今は仕事を入れずに積極的にやっています。

お葬式が組で出ると、今は葬儀場がありますが、当時はお寺、家でやっていました。何人もお葬式をしました。そうすると檀家ではないが、お手伝いを組の付き合いでする中でいろんなつながりができてきました。そんな中、東栄町には有名なお祭りがあります。東薗目の集落は今、３６世帯で１００名をきっている集落ですが、「花祭り」という７００年以上受け継がれている祭りがあります。これが東栄町の１１集落に残っています。どの集落も受け継ぐのがたいへんで、子どもがいない。「志多ら」が住みついた東薗目は１１集落の中でも最初になくなる村と言われていましたが、今は一番子どもがいる村になりました。「志多ら」が住み着いて、地域に溶け込んできました。そんなつきあいをしている中で「花祭り」を手伝ってほしいと地元の方に言われました。鬼や子どもが出てくる祭りです。私たちはプロの芸能集団が入るのは御法度だと思っていました。「毎日くらしているなら村人として手伝ってくれ」と言われました。最初は裏方の手伝いかなと思って練習に行きましたが、「舞を覚えろ」と言われました。本当にいいのかなと思いましたが、７００年の伝統を背負うことになりました。やるからにはちゃんとやらないと生半可な気持ちではダメだと思い、やり始めました。

１年目の花祭りでは「志多ら」が伝統芸能に入るということで、ファンが集まりました。地元の方や同世代はあまりいません。地元のおじいさんたちに勧められて入ったのですが、「プロが入ったらこの祭りは壊れるぞ」、「志多らの祭りになってしまうぞ」という噂がいっぱい出ました。ただ、「志多ら」が本当にここに住んで有名になっても出て行かない、ここで本当にくらしていくん

だと理解されたら、祭りは村の人や「花祭り」のファンの人など、いろんな人が混じったものになってきました。そういう付き合いがありました。

東栄町の人は、くらしと祭りがイコールです。生きるために祭りがあり、「未来の子どもたちやもっと先の未来の子ども達に地域でのくらしやつながりを伝えていく」というのがお祭りに仕掛けられたキーワードではないかと思います。いつ誰が祭りをつくったかわからないが、単なる芸能ではなく、これには文化やそこでのくらし、その地で大切にしないといけないことが全部仕組まれていて、それを受けついていくことが、地域でのつながりを持っていく大事なことではないのかと思っています。

この地球は人間のためにあるわけではない、人は地球や自然とともにいきることを考えないといけない、自然、地球を壊すのは人間ではないかなと思いますが、そういうふうにならないようにしたいものです。

「花祭り」は、いろんな神様が登場する物語になっています。自然を大切にする気持ちや、分け与えて使うということが祭りにこめられている思いだと思います。そういうことが、伝統的な祭りの中にあるのじゃないかな。ただ地域にずっとあるから守らないといけないとどうしても思ってしまいますが、そうじゃない大切なことがあるのじゃないかと思います。「志多ら」はそれをプロの音楽集団として表現していきたいと全国ツアー「蒼の大地」に取り組んでいます。「蒼の大地」は地球のことですが、これをテーマに和太鼓の作品にして、全国ツアーをしています。「蒼の大地」は３年間、コープあいちにも支援してもらってきました。あと５公演でこの作品が終わりになります。これを見ていただくと「志多ら」がどうして地域づくりをしようとしているかわかってもらえるかなと思います。

実際に「志多ら」がどうしてＮＰＯを立ち上げたかということをお話します。

地元にくらしている方たちと一緒に祭りをしてきましたが、だんだん、結婚して子どもが生まれ、個人で出ていくようになり、いろんなおつきあいが増えると、地域の抱えている問題を聞いたり、感じたりするようになりました。祭りが本当に受け継がれるか、集落が崩壊してしまうのではないか、と。２０数年前は明日生きるために、野菜を花壇に植えるか、芸能の活動をするためにメンバーのために笛を買うかという世界でスタートしました。「志多ら」の２万円しかない通帳でしたが、その２万円を野菜か笛かで迷ってきました。そういうときに地域のみなさんに、野菜をもらったり、いろんな支えをしてもらいました。

２０年たって自分達の活動で、地域に恩返しできないか、音楽の力、芸能の力で恩返しをと考えたのが、当時あったファンクラブ、友の会「てほへ」（「てほへ」は花祭りの掛け声です）を、ＮＰＯにして、「志多ら」とともに奥三河を元気にしていきたいということです。だから「志多ら」のメンバーは「てほへ」のメンバーです。映像も、スタッフがつくっています。ＮＰＯを立ち上げた

≪三河地域の事例報告≫

時に、名古屋の３０代の動画の専門家を、田舎の人の思いを伝える番組を作ろうと誘いました。取材のときだけでなく、ここで暮らしてくれと口説きました。今は「志多ら」のスタッフになって、映像を作って、ユーチューブや地元のケーブルテレビに番組を提供しながら奥三河をＰＲしています。

お手元に「てほへ」のパンフがありますが、その中にある活動を軸に活動しています。昔から受け継がれている伝統芸能の「花祭り」と、未来へむけて創造して伝統を作っていく「志多ら」、ふたつの活動をしっかり支援、応援して行く活動です。村に子どもがいないのでこの祭りを受け継ぐことができるのかが課題です。

それから「のき山学校」プロジェクトがあります。廃校になった学校がいっぱいあり、空き家もあります。地域に役に立つように使えるように、来年からは「てほへ」が指定管理者として入り、カフェや体験交流を行う準備をしています。空いている畑も空き家もあります。メンバーが地元の方と一緒に農業、茶摘みなどをしています。

それから放送局です。「志多ら」が１８名、ＮＰＯスタッフは５名います。２０数年前は地域のつきあい、音楽活動、営業を全部自分たちでやりました。人数が増えて組織が大きくなると分業化してきました。そうすると地域のおつきあいを、若いメンバーはできなくなりました。そうなると音楽の根っこを感じることができなくなるので、ＮＰＯが支え、時間があるときにそういう活動に関わるようにしています。その中から本当の音楽をつくろうと思ってやっています。つい先だって「のき山学校」は今年一年のイベントを終えて記念撮影をしました。間伐材を使って「木の駅プロジェクト」をしたり、セブンイレブンさんの自立助成事業で間伐材で何人か住めるハウスを造ろうという企画も行っています。

「志多ら」が短期間で地域になじめたのは、おせっかいな地元の人がいて、「そんなことを言っていると地域の人は理解してくれんぞ」と教えてくれたり、僕らの悩みを地域の人に伝えてくれたり、間に入ってくれる人がいて、短期間で根付けました。これが隠れたキーワードだと思っています。地域づくりのところで、いろんなことが言われているが、「志多ら」にとって、人と人、人と自然、お互いのことを理解して知り合う、受け入れる、そういう関係がこの活動の根っこにあると思っています。そういうことを忘れずに活動したいと思っています。「志多ら」は村の中のコープの配達の拠点になっていたり、今年から男性メンバーが消防団に入ったりしました。そういうことをしながら、芸能と地域づくりを一緒にやっているのが「志多ら」と「てほへ」です。さまざまな企画をやっていますのでぜひ遊びにきていただき、公演を見ていただけるとありがたいと思います。

≪三河の事例報告について≫

志多ら訪問

自然に包摂された音・物・人の絆

愛知書房・表現舎・編集委員　田中義二

６月２３日、「志多ら」「てほへ」を訪ねた。

城春にして草木深し

本部前で思わず口にした「国破れて山河あり城春にして草木深し」。ご存じ杜甫の「春望」の一節である。城とあるのは、城内いわば街のこと。愛知県北設楽郡東栄町はそんな山の中だった。そうかこんな自然に包まれて音楽が生まれるのか…。ただ、国破れて、ではなく、国破れんとして、になるかもしれない近頃の政情。ＴＰＰ、農協・農政改革法と、国の土台が危ない。

しかし、彼らとの２時間後、その心配は解消した。己が芸とその土台である日常を、慎み深いが確信をもって語る志多らたち。自然との絆・人との絆を壊さない町民がいて、同じ思いの彼らがいる。ＴＰＰが来ようが、グローバル経済が襲いかかろうが、山河悠然としてその姿を変えず、民黙々と土を耕し、草木更に深し、となるであろう。

その「志多ら」は平成２６年度愛知県芸術文化選奨文化賞、「てほへ」は同年度ふるさとづくり大賞団体賞（総理大臣賞）を受賞している。志多らの会員は即てほへ。つまり、同一人物が「表現」と「暮らし」の両面で認められたということになる。考えてみればすごいことだ。芸は立派だったが、生活はムチャクチャ、でも許されるのがこれまでの芸の世界だった。

自然との絆

志多らを訪れる前の５月２９日、新城市で「蒼の大地」公演を観た。全国公演の千秋楽。満員の会場はみな興奮気味の笑顔で「ようこそ、お帰りなさい」の感に溢れていた。

舞台の進行とともに心が震える私だった。自然を克服し、人間が自然を支配しようとする近・現代があった。それを越えて、人間の存在は自然との関係性の中に成立しているとする世界観。もっと単純に、光や熱や酸素など、生存に必要なものを無償で与えてくれる自然。それらを「偉大なる自然からの想い」とし「それを音に変えて、伝えてゆきたい」という志多ら。太鼓と笛の音からその気持ちが伝わってくる。我々は人と人との絆・協同については議論してきた。だが、自然を取捨し「人工」に埋没する都市生活は、やはり何かを欠落させている。都市において自然との関係性を作るには何をすればよいか。宿題をもらった。

人との絆

合奏は、さまざまな個性をもつ楽器の「合意の形成」で成り立つ。楽器の出自自体、民族的基盤が違う。打楽器は狩猟採集民族、木管楽器は農耕民族から生まれた。異質なものが集まって一つの新しい音・新しい世界を生み出すのが音楽だ。そして志多らには演奏リーダーがいるだけで指揮者はいない。まさしく「協同の世界」であり、それが「表現」の本質だと思う。

「協同の世界」を体現しているから、志多ら＝てほへは様々な地域活性化活動が可能なのだろう。だから今、新しいモノやコトを創り出すのは同質の人材を集めることからではなく、異質の人材を集めることから始まるのではないか。人と人との絆をいくつも作っているてほへ＝志多らの様々な活動の源泉もそこにあるのでは？と思った。

地域との絆

自然からのメッセージを音に託して伝えるには、そこに暮らし、地域の自然と共にある人々をつかむ必要がある。そう考えて志多らはゆっくりと地域活動に加わった。この場合の立場を「てほへ」

≪三河の事例報告について≫

としてＮＰＯ法人化している。やがて受け入れられ、地域の一員となる。そしてそこから得たものを舞台に再創造する。花祭りへの参加はその典型だ。今、このことは他の芸術集団にとっても重要課題だと私は思う。地域の問題を地域の人たちと共に学び考え、表現にして返す。地域に必要とされる芸術集団であるための地域との絆作りが必要だ。ここでも宿題をもらった。

「作る」ということ

志多らは音作り。てほへは人間関係作り・農作物を含めた物作り。彼らの日常はすなわち「作る」と関わっている。例えば彼らが作るログハウスは植林から始まり、育てたその木を使って細工する。農作物も、苗から育て花を咲かせ実らせて刈る。「刈る」は「殺す」だから殺すために育てる。殺して己が生命の再生産をする。都会人の我々は、いきなり買う。製材された木、ビニール袋に入った野菜。みなすでに刈られた＝殺された物。それを買う。作らずに買う。その精神の習慣の違いは、きっと人間の奥深いところの違いとなっているに違いない、と私は思う。そして、「作る」と「買う」、「生産」と「消費」を含めた「生活」の協同組織…、そんな妄想につながる。

志多らとてほへは大きな問題をつきつけてくれた。

「蒼の大地」公演より

東栄町にある　蔦の渕

（川幅いっぱいに数十の白糸となり落下している）

≪コープぎふの事例報告≫

八百津町久田見地区 買物支援の取り組み

辻 善一
生活協同組合コープぎふ　多治見支所支所長

こんにちは。多治見支所の配送エリアは、陶器産業で有名で、名古屋のベッドタウンになっています（多治見、土岐、瑞浪、可児、美濃加茂市、可児郡、富加町除く加茂郡）。北は益田支所のエリア、飛騨支所のエリアと隣接しています。支所全体で、１週間で１万６０００人に商品をお届けしていて、職員は１４５名の体制でやっています。

久田見地区は支所からは１時間半くらいかかる山間地の集落です。八百津町をさらに山道を登った、町西北部に位置する標高５００Ｍの高原になります。久田見地区は、世帯数は４８８軒の集落です。組合員１６４名。３３．６％で入っている方は多い地域です。これは２０１３年度の組織率です。この地区は多治見市・可児市と比較すると６５歳以上の年齢構成率が約２倍と高くなっています。久田見地区はこのように高齢の方が多く少子高齢化が進む集落です。「くたみまつり」は非常に有名です。半沢直樹の著者である池井戸潤さんがこちらの出身で、このまつりにかならず参加されています。

買物支援に至る経過ですが、地元のスーパーが閉店になり、その時、地域住民が町長になんとかしてほしいと陳情に行かれました。町長さんはＪＡにお願いにいきました。ＪＡとしては店舗も営業しない、移動販売も縮小していて、どうしようかと、コープぎふに相談しようとなって、理事長と懇談をもちました。当初は、ＪＡの店舗で移動店舗ができないかと言われました。しかし移動販売はできないけれど、共同購入の基盤があるので、それを活かしていくこととなり、地域のかかわりについてはＪＡのネットワークをいかし一緒に連携してすすめましょうということで、活動が始まりました。

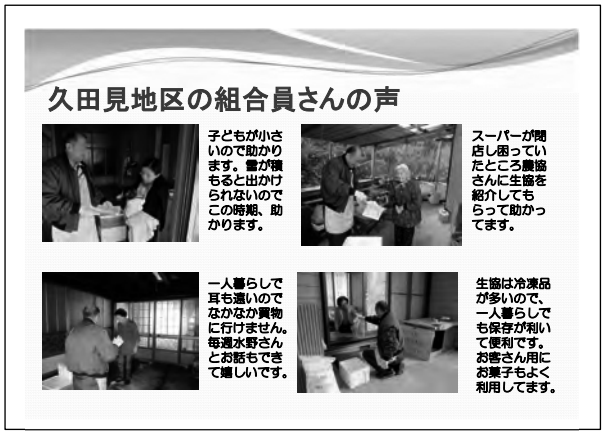
最初に、ＪＡ職員向けの生協説明会をもちましたが、このときはＪＡの方だけでなく、町会議員、自治会長、地域住民の方も集まりました。この中で、すでに生協を利用している方もいますが、初めて商品案内を見た方は、こんな小さな字でＯＣＲ書けるのかと言われました。質疑応答して、みんなで広げる場を持って行きましょうとなりました。その中で、説明会や訪問は、通常、生協が主体でチラシを配布してお願いしますが、自治会長が、それは生協のチラシ配布でなく、もっと住民は知りたいので、自治会の回覧板で入れようとなりました。ＪＡとコープぎふが、一緒になって説明会を開催しました。ＪＡも共済を扱っていわばライバルですが住民が買い物できずに困っている状況があり、主体は地域住民なので、商品交流会の説明の場を持つことになりました。試食品は、

≪コープぎふの事例報告≫

職員の視点だとわからないので、久田見にお住まいの組合員にお聞きしました。惣菜とかレトルトカレーなど、若者だけでなく高齢の方も食べているなどの紹介も受けて、説明会に臨みました。通常の商品交流会では５分くらいですが、おひとりに１時間から１時間半じっくり説明しました。５０人の参加でしたが多くの方に興味を持ってもらいただけました。こうした取り組みから、２３名の方がご加入されました。また、活動の広がりから、共同購入班ができ、法人登録で老人ホームにも班ができました。

この取り組みは、２０１３年の年末前にＪＡから要請があり、２０１４年の１月から活動を進めたものです。時間も経過しており、組合員がどう感じているか、お聞きしました。

「生協は冷凍品が多いので保存が利いて一人暮らしに役立って便利です」とか「なかなか買物にいけないので、毎週担当の水野さんとお話ができ嬉しい」、「毎週新しい情報とかあり、会えば楽しい」などの声が聞けました。「ＯＣＲが書きにくい」ので、「一緒に書いてあげるわ」などの活動もひろがっています。小さい子どもさんがいて積雪量が多いので買い物に行きにくく「役に立っている」というお声もいただいております。



買物支援は、久田見だけの取り組みだけではありません。今年度、瑞浪市の社会福祉課から「高齢者の一人暮らしの方がみえるので生協の案内をしてほしい」という連絡がありました。個人的なことかと思いましたが、よくよく聞いてみると市としての対応の要請で、実際に福祉課の方が生協の職員と一人暮らしの方のところに訪問して生協に加入していただきました。今までは我々が行政に働きかけることが多い状況でしたが、行政からの生協さんお願いしますと働きかけがありこうした活動が出来るようになりました。

ＪＡの取り組みもそうですが、地域住民が主体になってやれることに対して我々がかかわっていくことが大切です。２０年前にはなかったつながりがどんどんできるようになってきました。このことは担当のやりがいにもつながっています。商品をお届けしている意味、お役立ちできていることが実感できるようになってきました。コープぎふは「笑顔あふれる協同のくらし」を理念として掲げています。日常の活動と結びつけて行動できるようになり、職員の中でもモチベーションがあがりました。「おたがいさま東部」も設立し、有償のたすけあいの仕組みも始まりました。熱中症で動けない方が食べるものがないという要請が入り、すぐに対応したこともありました。久田見だけでなく瑞浪でも一人ひとりの職員と地域との関係が前進して、目に見える活動になってきています。

買物支援の主人公は地域の住民です。これを柱に物事を考えていくと、ＪＡとか生協とかの垣根が取れるんですね。その視点で、どうやったらできるのか、という相談になります。

さらに、インフラとノウハウを活かして応援し

ていく活動を久田見で継続してやっていきます。通常の担当者の仕事として組合員さんにかかわっていくことが、もっとできれば良いのかなと思います。

買物支援は、山間地の問題だけではありません。市街地も高齢化しています。生協の事業活動で総力を上げてすすめていければと思います。

久田見での取り組みは、ＪＡの久田見の支店長今井さん、多治見支所の地域担当澤田さん、チームリーダー中林さんなどが進めました。ＪＡに生協の商品案内が置いてあって、ＪＡの職員に生協の説明をしていただきました。画期的なことです。地域の方が困っていて、どうしようかとなって地域の方が「商品案内をＪＡに置いてよ」となりました。まさに地域住民の方の声から実現したものです。

買物支援とは、地域で孤立させないこと、このキーワードを今後の課題にしてすすめていきます。

八百津町にある　五宝滝

八百津町の中心と久田見地区の間にある　杉原千畝記念館

≪岐阜の事例報告について≫

久田見地区訪問

地域における新しい協同のかたち

岐阜地域・編集委員　熊﨑辰広

久田見地区で二回目の商品交流会が開かれるというので、取材に出かけました。

八百津市街から長い細い曲りの多い山道を３０分ほど走りながら、峠を越えると久田見の集落があります。その距離感が、独自の山村文化を生み出し、また高度経済成長を経て、急激な人口の減少にともなう過疎化の遠因ともなっているという実感は、岐阜県内の例えば白鳥から石徹白へ、また明宝から小川集落への峠道の感覚と同じものでした。

商品交流会の会場は、ＪＡめぐみの久田見支店の３階の会場でした。辻さんの報告にある最初の商品説明会から今回が２度目の企画でした。今回もまた、ＪＡの店舗での案内などでより公的な募集がなされています。参加者の３分の１は生協に加入されていない方で、おさそいで参加されていたようです。参加者のほとんどが後期高齢者の婦人で､会場ではみな知り合いのように打ち解けて、三つのテーブルを囲んでのおしゃべりが弾んでいました。

その会場で、今回のＪＡと生協との共同の取り組みの立役者の前支店長と、また現支店長と生協のエリアマネージャーの大山さんの３人からお話を聞くことができました。その中からいくつかのポイントをあげることができるようです。

ポイント①　つながり　ＪＡめぐみのの専務はかつて美濃酪連の会長でもあり、その美濃酪連とは、それこそコープぎふの前身である岐阜地区市民生協のころから深い関係があり、そこの信頼関係がベースとしてあったようです。コープぎふ理事長とＪＡめぐみの専務との話し合いを契機に、ふたつの組織の共同作業がすすめられました。その過程のなかで同じ協同組合でもあり、組織としての垣根が除かれ、また自治会も巻き込んでの地域全体の公共的な位置づけが可能となったようです。当初はお店のような運営が求められていたようですが、生協の経営資源である共同購入事業を利用した、個配を中心としての利用の拡大がすすめられました。

ポイント②共同購入の利用の蓄積　複数の農協職員の方が組合員として利用されており、生協の理解も早かったようです。また二人のＪＳＳのサポーターによる配達が地域をカバーしていました。一人のサポーターの怪我によるリタイヤで、そのＪＳＳ班が個配コースのベースとなっています。二人のサポーターは１０年来の配達作業のなかで、地区の多くの住民の方とのつながりがあり、それが今回の利用普及の力となっているようです。

以上がいわば第一段階だというのが、エリアマネージャーの大山さんの考えであり、次のステップについての模索が始まっているようです。その内容は「食品」の利用という段階からＪＡと生協の資源も生かした“くらしづくり”への参加・協同にあるようです。

ポイント③　主体性の確保　会場で直接お話しを聞くことができなかったのですが、ポイント②で紹介した二人のサポーターの方もみえており、彼女たちの動きは参加者とは少し違っているように感じました。つまり、彼女たちが主体となって動けるようなゆるやかな組合員の集まりができないか、という期待を持たせるものでした。『おたがいさま東部』のような活動もそれが母体となって発展できないかという印象をもちました（実際にその動きがあるようです）。

≪岐阜の事例報告について≫

ポイント④　あたらしい取り組みの可能性
実は久田見地区から８キロほど離れた所に福地集落があり、久田見の３分の１、１５０戸ほどの集落規模ですが、そこではまだＡコープのお店があります。まだ運営はされてはいますが、１５０万円の売り上げに対し、５０から６０万円のロスがあるといった、経営的にはかなり厳しい状況で、早急な対策が求められています。ここにも生協に期待されているところがあります。たとえば、生協が商品を届けて、農協の職員が配達する、といった新しい形も模索されつつあるようですが、従来の既成の事業内容の延長ではなく、新しい形が求められているようです。それに生協がどうかかわるか、この取組の帰趨はまた、久田見地区にも反映していく可能性もあるようです。

ポイント⑤組合員交流　多治見市など都市に住む組合員が、この久田見の組合員と恵まれた自然のなかで、なんらかの交流の企画ができないか、ということです。例えば、久田見では地区内に４つもの製茶工場があり、お茶摘みの体験とか製茶工場の見学などのメニューも可能なようです。地区内では行列のできるパン屋さんとか、有名な三角あげのお店などもあります。また久田見地区のお祭りも有名です。

そして最後に：
ポイント⑥　配達職員のやりがい　ひとつ関心があったのは、辻さんの講演の中にある「職員のやりがい」が生まれている、という発言でした。一日配送トラックに同乗して、担当のＭさんの話を聞くことができました。彼は、新人ではなくベテランの職員で、直接「やりがいを感じる」などという感想を聞くことはできなかったのですが、誠実な組合員との対応（出会える人には必ず、今度の試食会の案内を伝えていました。）や配達作業に取り組んでいる姿勢など、むしろ彼の背中を通して、「やりがい」につながるものを感じました。

なお、今回の取り組みについては『全農』もつよい関心をもち、取材訪問があった、ということでした。

≪尾張地域の事例報告≫

「大規模団地等における孤立防止推進事業」における地域とコープあいちの連携

内山 和美

社会福祉法人 名古屋市名東区社会福祉協議会　事務局長

名東区社会福祉協議会の内山と申します。

まずは、ご存じでない方も多い「社会福祉協議会」について説明したいと思います。社会福祉協議会は､全国の都道府県及び市区町村全てにある、地域福祉を推進することを目的とした社会福祉法人です。では、地域福祉とは何かといいますと、「住民が自分の地域の福祉課題を発見し、それを解決すること」となっています。社会福祉協議会の一番の仕事は、その地域課題解決に向かう住民の方々を応援することです。その性格上、行政と協力して公共性の高い事業・活動を実施することにあわせて、民間団体であることを活かし、地域に根ざした固有のニーズに対応した事業を行うことになっています。

名東区社協の事業は､都市圏ということもあり、悲しいかなあまりインパクトがありません。そこで他都市の事業をご紹介しますと、例えば、岐阜県の高山市社協さんは、山間部の一人暮らしの高齢者が､冬になると雪で生活がしづらくなるため、冬だけ街中でファミリーハウスに来てもらい、その生活を支援する事業をしておられたり、また、冠婚葬祭の洋服の貸出事業や葬祭事業をしている社協もあります。当時そうしたニーズを満たす会社などが地域になかったために、社協が行っているのでしょう。社協がどんなことに本来取り組まないといけない団体か、こうした事案からおわかりいただけるのではないでしょうか。

さて、次に名東区についてのご紹介をします。昼間人口が人口に比して大幅に少なく、名古屋の中ではベッドタウン的な存在であるのに加え、地下鉄東山線が通り、郊外の落ち着きと都市機能を併せ持っていることから、特に東山線終点の藤が丘駅周辺は「住みたい街ランキング名古屋東部エリア１位」となっている人気の区です。そうしたこともあって転勤族が多く、転入出でほぼ１割の住民が毎年入れ替わるという特徴があります。人口は１６万、高齢化率２０％で、名古屋市で下から２番目という若い区でもあります。隣接する長久手市や日進市に大学が多くあることから、女子大生がたくさん歩いています。以前勤務していた中村区はお年寄りが多かったこともあり、異動して来た時には、同じ名古屋市でこんなにも違うのかと思ったほどです。

しかしながら、名東区でも、大規模の市営住宅がある学区には、高齢化率が３０％を越えている所もあり、同じ区の中でも状況はまちまちです。今回、紹介する事例の舞台である引山学区は、守山区との境目、区内でも高齢化率が２番目に高い学区になっています。学区内の市営住宅引山荘では高齢化率は３０％以上で、この学区では、生鮮食料品の買えるスーパーがなくなっている、そんな現状があります。

この引山学区で、地域の課題を解決するために住民の皆さんとこの事業に取り組もうと、社協が思い立った背景をまずお話したいと思います。２０２５年、団塊の世代が後期高齢者になるということで、地域包括ケアシステムの構築を国が打ち出しています。高齢者が増え病院にも、施設にもベッドがなく入院・入所できなくなる、そこで在

宅でなんとか支える仕組みをつくらなければならない。すると、サービスの担い手が地域におりてくる。地域の方が支えないと支援を要する方の生活が維持できないということになる。今以上に、地域の方々が担い手として期待されています。名古屋市も名東区も、この地域包括ケアシステムの構築に向けた体制づくりを現在進めています。区役所としては、医療、介護、福祉の専門機関・団体と地域の住民の方々が協働するための会議体を作ったり、社協も地域福祉活動計画に基づいて、今後の地域課題の解決、個別支援に取り組むことを打ち出しております。今までも社協として学区の活動を応援してきましたが、名東区社協においてはそこからもう一歩踏み込んでの、地域ごとのニーズ解決のための具体的な事業・活動までは正直できていなかったというところがあります。

私個人としては、社協職員としてそこに踏み込んで行かないといけないだろうと感じていました。そこで昨年度、名古屋市には全小学校区に設置されている地域福祉推進協議会という組織があり、これは地域団体で構成する地域福祉を推進するための協議体で、活動が活発なところもそうでないところもありますが、まずこの地域福祉推進協議会を全小学校区回って名東区の各学区がどういう状況になっているか知ろうと、お話を聞かせていただきました。名東区はもともとまちづくりへの熱意が深く、区役所や社協の事業へも非常に協力的な土地柄です。お話を聞かせてほしいというと、多くの役員さんが集まってくださいました。お話を聞き始めると、３０分の予定が、延びに延びて２時間となる…といった学区が多かったです。話しているうちに、学区には区政協力委員（いわゆる町内会長）と民生委員がいて、大抵、地域の中で福祉のことは民生委員がやるものと思われていたふしがあります。福祉ニーズがあると学区では「それは民生委員の仕事」と民生委員だけに任されることが多かった。ところがお話を聞いてみると、いわゆる学区のトップである区政協力委員長さんの多くが、ご自身の学区の福祉課題を明確に認識しておられることがわかりました。支援を要する高齢者が増えて、マンションで孤独死する高齢者が出たことから自発的に高齢者の見守りをしている区政協力委員さんがいるとか、認知症の人がいつも道を歩いている。家に帰れるか心配だとか、災害になったらこうした方をどう支援していったらいいのかとか、さまざまなお話を承ることができました。その時私が思ったのは、今までは区政協力委員の悩みと民生委員の悩みは違っていたものが、一致してきた。すなわち、まちの課題と福祉の課題が一致してきたということです。これなら、地域の福祉課題解決のための事業に学区の皆さんも協力してくださると思い、大規模団地等孤立防止推進事業を実施することを決断しました。

この事業は平成２４・２５年度に５区社協が既に取り組んでおり、いろいろな成果が出ていました。つまり名東区は後発ということです。大規模団地は概ね、高齢化率が高く、孤立死もあったりして比較的福祉課題が凝縮されている場所です。こうした所で高齢者の孤立防止をすすめていくために、地域課題を解決する、その際住民と、さまざまな専門機関・団体が協働することがこの事業のポイントです。

事業を実施するにあたっては、やはり高齢化率の高い地域でということで、名東区では市営引山荘と市営梅森荘の２つの地域で実施することになりました。

引山荘は先述の引山学区にあります。事業実施にあたって、学区の区政協力委員長に「一緒にこの事業にお取り組みいただけないでしょうか」とお願いに行くと、委員長は「以前からうちの学区は高齢化率も高いので高齢者のことには取り組んでいかないといけないと思っていた。この際ニーズをしっかり把握して取り組みたい」と快諾。引山荘担当の区政協力委員と民生委員、老人クラブ役員、いきいきセンター職員に入ってもらって会議を８月に始めました。会議で、まずアンケートをやってニーズを探しましょうか？と言うと、民生委員さんが「高齢者が一番困っているのは特に生鮮食料品の買い物！スーパーがなくなって買い

≪尾張地域の事例報告≫

物ができなくなったから」とすぐ言われました。そこで、では買い物支援を大きな目標として考えていこうということになり、買い物支援であれば何に取り組めばよいのか、他地区の事例等を紹介しながら皆さんで検討。そこで浮上してきた方策が移動販売です。ここで、コープあいちにお話を聞いてみようということになりました。

なぜここにすぐコープさんが出てきたかといいますと、この事業をやるかやらないか考えていた時に、他区の事例を見ていてもＮＰＯや生協と連携しているところが多くありましたし、私自身恐らくうちの社協と住民だけでは地域の課題を解決することは難しいだろうと感じていました。これはコープさんに挨拶に行かないと、と思っていた矢先に、ちょうどコープさんも社協との連携を考えていたということでご挨拶に来てくださったのです。事業をやる前でしたが、こういう事業をやりたいと考えていて、もしかしたらお力添えをお願いするかもしれないというお話をしてありました。

そこで、早速会議に移動店舗の説明に来てもらいましたが、当初は会議を始めたばかりのころで、会議のメンバーのみなさんもご自身が会議に出る意味を測りかねておられる感じだったこともあり、「高齢者が買い物に困る現状を解決する」という目的よりも、コープにきてもらって売り上げが低かったら悪いという遠慮や、困っていると言っても実際買いに来る人があるのかという不安の方が先に立ち、消極的な意見が多くを占める状況でした。けれどもコープさんが、「もちろんある程度利益がでないと困りはするが、それより大事なことは地域の生活を支えるために、移動店舗がお役に立つなら、地域の方に同意を得て協働して進めていくこと。お金のことは二の次」と仰ってくださったことで、私たち社協も力を得ました。このことを住民の方に説明すると安心してくださり、その他の具体的な事項についても検討した結果、３回目の会議で、コープあいち移動店舗に来てもらおうと決まりました。買い物だけでは孤立防止にならないので、集会所であわせてサロンをやろうという意見が出て、全員一致で週１回サロンを併設する方向で現在進んでいます。サロン単独では参加者の減少や固定といった課題がありますが、移動店舗を軸にすればいろいろな可能性が模索できます。住民のみなさんが積極的に様々な案を提示してくださっています。

この事案は、小地域において地域課題を解決するために、住民の方と私たち社協に加わる第三の力（今回はコープあいちさん）が協力して、実現しそうな区内では初めてのものになります。ここが成功すれば他の学区にも発信できることになると思いますし、またここ引山荘においても、移動店舗招致＋サロン実施をきっかけに、もっといろいろ住民の困りごとが掘り出されていくだろうと思います。それに対応していかなくてはならない。やればやるほど次の課題が見つかるだろうと思います。しかし、ここで培った住民同士、住民と社協とそしてコープの連携があれば次の課題にも対応できるのではと考えています。

また今回、話し合う場の大切さを感じました。会議をやって、初めは会議の目的を測りかねていた方々が、困りごとや現状を共有するうちに、活発な意見を出し、役割を自発的に担ってくださるようになりました。先述のように、住民と社協、住民とコープの連携、そして住民同士のつながりができていくことに、大きな可能性を感じました。

もう一つが、新しい力とつながることの大切さです。今回はコープさんでしたが、もしかしたらＮＰＯや企業とも、今ほかの事でつながっている所とも新しい何かで協力していけるのではないか、つながることは調整も必要である意味力がいりますが、やはり新しい力につながっていかないとできないことがあります。地域の方が新しい力につながるために、つなげる役割は私たち社協が担うべきであることも感じました。

今後、ますますこのつながりを活かして、地域のチカラを発掘できればと思います。まずこの事業の第一歩が成功するように、引山荘のみなさん、そしてコープさんと力を尽くしていきたいです。

・

≪尾張の事例報告について≫

引山荘訪問とインタビューから

新しい連携、その後

尾張地域・編集委員　下里玉美

今回のこの取り組みは、名東区社会福祉協議会による引山荘孤立支援防止事業を発端に、都市部における買い物難民の問題､孤立の問題を､社協、自治会、民生委員、そしてコープあいちが、互いに持っている力を合わせて「新しい力」で解決しようとするものです。

問題解決のために半年間協議を重ねた結果、社会福祉協議会と自治会・民生委員とコープあいちとの協働として「移動店舗」は３月２２日（土）、２８日（土）の２回のお試しを経て、現在、火曜日の名東コースに組み込まれ、本格営業が行われています。

３月２２日の初回お試しの日には、１２０名の方が集会所で開かれたサロンに参加し、９５名の方がお買い物を楽しまれました｡また､その場で、コープあいちに加入された方も２８名おり、コープあいちの移動店舗への期待の高さを感じます。２８日はサロン８０名、お買い物６２名、加入５名でした。

この結果を受け、４月２１日（火）より、引山荘での移動店舗の利用が正式にスタートしました。直近の利用データを見ると、毎回２０名以上の利用があり、集会所では社会福祉協議会の皆さんがサロンを開催し、民生委員さんや地域のボランティアの協力も得ながら喫茶店や健康チェックをおこなっています。サロンには毎回２０～３０名程の参加があり、お茶をしながら、明るく元気に楽しげな会話が弾んでいます。

スタート直後は、「すぐに食べられるもの（お弁当やサンドイッチ）がほしい」「１１：３０からになっているが、来るのが少し遅い１１：４０になっている」「予約注文商品の一覧などがあると良い」「今日の特売がわかるようなチラシを作ってもらえないか」「階段が登れないわ」などたくさんの意見がだされ、ひとつひとつ解決に向けて相談されています。

この取り組みが始まって１ヶ月半、ご講演いただいた内山様に改めてお話を伺いました。

サロンだけでは、来る人が固定化されがちですが、プラス「店舗」という要素があることによって、買い物に来た人にも声をかけることができます。ネットスーパーではできないこと。商品を見て買える。商品のラインナップの要望のキャッチボールができる。とても助かっています。

また、何かちょっとした困りごとがあっても、民生委員さんに相談しに行くのは腰が重いものです。こうした「サロン」プラス「店舗」の取り組みがあることによって､ここが見守りの場となり、また民生委員さんの「総合相談窓口」の要素をも持ち合わせています。

名古屋市が進めている地域支え合い事業は、地域のたすけあいでやっていかなければなりません。サロンを３年で倍増させる計画もあります。地域

≪尾張の事例報告について≫

力の再生が掲げられ、担い手の確保のためのボランティアポイント制度もあります。

しかし「高齢者を地域で」という地域包括ケアシステムを築くには、まだまだ課題も多いように思います。　（内山様のインタビューより）

６月１６日（火）のサロン「なごやか喫茶」と移動店舗の様子を報告します。

天気は、あいにくの曇り時々小雨にもかかわらず、この日は近くで民生委員さんによるクッキングがあったこともあり、サロンには２９名の方が立ち寄り、七夕に向けて、短冊に願い事を書かれたり、折り紙を折ったり、おしゃべりを楽しんだりと過ごし方はそれぞれ。本格的な裏千家、お抹茶（１００円）が大人気でした。

移動店舗では３７名の方がお買い物をされ、３３，４３５円の売り上げがありました。

＜利用者の声＞

- ミルクプリンがおいしい。今日は８個買ったわ
- お買い物が楽しみだし、サロンでお友達とおしゃべりもできる
- 健康チェックしてもらうと安心する
- お買い物した後、座ってお茶できるのが良い
- 買ったものは集会所の冷蔵庫に入れておいてもらえるのよ
- せいきょう牛乳は必ず買うの
- キャベツ大きいわね

- このメロンおいしいの？
- このナッツ安いわね

お買い物を楽しむお声をたくさんお聴きすることができました。意外にも男性も多く、約２割の方が男性でした。

サロンがあるので、混雑を避けて、先に買い物をされる方、お茶をしてから買い物をされる方、健康チェックをされてから買い物をされる方と、皆さん、うまく時間を調節しながら利用されています。

また、地域のボランティアの方々がたいへん明るく元気でにこやかです。朝早くから、掃除、会場のセッティング、お茶の準備。テーブルには自宅の庭から摘み取ったお花を活けて素敵な空間を演出されていました。

≪三重地域の事例報告≫

みえ次世代ファーマーズ miel（ミエル）

石本 慶紀
石本果樹園

ミエルについてご報告させていただきます。

まず、**４．４％**。これ三重県のある数字なんですが、何のことかな？この数字が何か考えてください。これ、三重県内で農業をやっている若手農家の数の割合なんです。

４．４％しか、やっている人がいません。

ちなみに、６０歳以上の割合は９０％です。

じゃ１０年、２０年たった時に三重県の美しい農村の環境はどうなっているか？考えていただきたいんです。

私たちはその課題を共有しよう！迫り来る未来をおびえているばかりでなく、こうやっていこう。情報を共有していこう！とスクラムを組んで始めさせていただいたのがこのミエルです。

２０１３年９月２４日に三重県東西南北のいろんな農家から２０名ほど集まって結成しました。

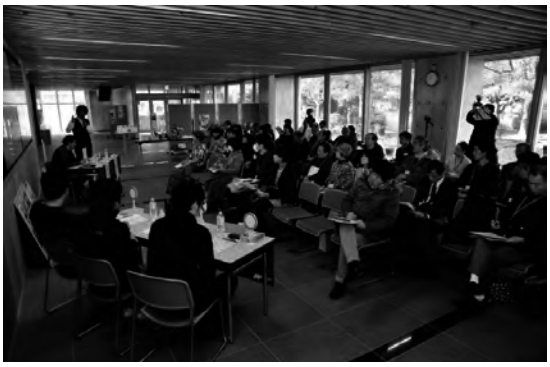
そして、「みえ次世代農家トークバトル」という活動をしていますが、それを一つの例として発表させていただきます。

これは「三重テラス」でやったときの様子です。

2014年3月19日（水）東京日本橋 三重テラスでのトークバトルイベントを開催しました！

三重県が、しっかり力を入れて、がんばっているアンテナショップですが、「三重テラス」を知っておられる方どれくらいいますか？三重県の人しか手が挙がらない、非常に残念！

こちらは三重大学です。



コープみえさんにご協力いただき。第２回目を１月３１日に開催（三重地域懇談会主催「三重のつどい」）することが出来ました。

４人の農家がパネラーで、普段農薬使っていますか？土触っていますか？地域と連携していますか？奥さんに支持されていますか？もうかっているの？など、みんなの前で発表して順位をつけます。誰の発表がよかったか？という、むちゃくちゃなことをやっています。

その場で順位をつけます。そういう活動をやらせていただいています。

ミエルは現在２０名で運営しています。

苦しい未来が待っていると悲観せずにがんばるぞ！とやっているのがミエルです。

ミエルの中から、新しい農業のパターンを３例ほど紹介させていただきます。

三重県の向井理です。やっと女性の顔が上がり

≪三重地域の事例報告≫

ましたね。Miel会長の浅井農園の浅井雄一郎さんです。

大きな企業と連携していまして、通常２ｍの高さなんですが７ｍまであげたハウスです。

個人ではリスクがありすぎるので、ほかの企業にリスク分散しながら、やっている経営的な農家のスタイルです。

テレビに出ること多々あるんですが、白衣をバシッと着てトマトの成分をしっかり分析されています。経営者としての農家がいるよ！ということです。

もう一人、伊賀ベジタブルファーム株式会社の取締役社長の村山さんです。

彼は地域にたくさんある有機農家を一本にまとめて商売をして行こうという方で、ブランド「へんこ」を立ち上げました。この「へんこ」はなんともならんぞ、という意味です。なんともならんうちの一番なんともならんという人。

力が集まれば、すごいです。株式会社化して一番有機の世界でがんばっている方です。

最後に百姓の話です。これ僕です。

僕も当時は髪長かった。自分でつくったみかんを自分で売るというスタイルをやっています。

これはおじいちゃんから３代続けてやっているスタイルです。

企業と連携していく仲間、地域をコーディネートする仲間、昔のやり方をそのまま守って継承している自分です。

守っているから、新しいことをやらないのかというと、そうではないです。

私は、自分の農園を守りながら、今、みかん農家に遊びに来ませんか？と投げかけをさせていただいています。

トレッキングブームと熊野古道がブームになっていて、みかん畑トレッキングの取り組みを実地させていただいております。

私は３７歳、あと３年もすると、４．４％の数字枠から抜けますが、子どもたちが継いでくれたら、なんとかなるのかなあと思っています。

話は戻りますが、４．４％です。これどうしましょう？　みなさん！

≪三重地域の事例報告≫

たとえば、数が少なくなったら価格があがるからお前らの天下だな　という人がいます。

そうですよ！１００円で買えるものが、２００円出しても、３００円出しても買えない世界が来るのではないかと思いませんか？

ただ、生産現場の話をさせていただきますと、例えば、みかん。

１割から２割、イノシシやサルに食べられる。

今、僕の地域では８５人のみかん農家がいますが、４０歳以下は７名です。さあどうしよう！

２０年して、１０人で作らないといけない。

イノシシやサルやトリのために、みかんをつくる未来がまっています。

このままじゃいけないのが現状です。

そのために、ミエルという団体を立ち上げています。

めちゃくちゃ、皆さん応援してくれています。

ただ、朝倉先生の話を聞いて、はっとしましたが、がんばれという言葉が一番、当事者を苦しめているということ、どんな発表をしようか迷っていましたが、がんばれという言葉を掘り下げて、みなさんと考えてみたい。

「おまえがんばっとけよ！おれしらない」と使っているのと、「一緒にがんばれ」と使っているのとに分かれると思います。

先月の企画はコープみえさんが一緒にがんばろうと手をさしのべてくれたと思っています。

参加したメンバーも一緒にやらせていただきました。

つながり、いいくらし、というとものすごく、いい言葉だが、現場で何が起きているかというとつながり疲れ､おもてなし疲れが起こっています。

なぜ、それが起きているかというと、間に入ってケアをしてくれる、間に入ってくれる人がいないんです。

六次産業化ありがたいが､農業が伸びていくぞ、素敵になるぞ！という声かけはいいんですが、なんでも農家にやらせてはいけない。

焼鳥屋の店長に人気あるから明日から美容室もやれという。　そんな話です。

専門外のことを、いくつもやらされると疲れます。

でもなんとかしたい、だからがんばって体力とお金と時間を使っています。

是非、この辺で間に入って一緒にがんばろうという声を挙げていただけるとうれしいなと思います。

繰り返しになりますが、１月共同開催の農家バトルがそういった事例の一つになるよう、日本各地で里山がなくなる問題が起きている。そうした事例として提案できるようにしていきたいというのが、ミエルのメンバーで話し合われている内容です。

そうやって、活動することが、いいくらしにつながっていくような取り組みをしないといけない。

掘り下げると、こういう未来が待っているので悪いくらしにならないように工夫しようというのもメッセージだと思います。

メンバー代表として来ていますので、あまり踏み込んでの発言は出来ませんが、笑顔で一生懸命やっています。

詳しいことは、ひとりずつパンフレットに載っています。

パソコン、携帯電話で三重ミエルと入力していただくと、私たちのＨＰ、フェイスブックがあります。

「いいね！」を押していただいたり、がんばれよ！とコメントをいただくとモチベーションがあがります。

今後ともよろしくお願いいたします。　・

Mielのホームページ-石本さんのページより
「子供たちがかっこいいと思える農業を」

≪三重の事例報告について≫

mielさんとの出会いに新たな陽射しが！

三重地域・編集委員　飯村初美

●みえ次世代ファーマーズ「miel」さんの取り組みに参加した感想と彼らとの出会いから、三重の新たな日射しへの応援メッセージです！

彼らの活動を知ったのは、２０１４年の４月頃だったでしょうか？３月１９日に三重テラスで第１回「みえ次世代農家 ガチトークバトル」が開催され、三重地域懇談会に情報として紹介いただきました。

今時の農業ってどんな感じ？
これからの農業ってどうなるの？
自然の中で田舎暮らし、夢見たりするけど現実はたいへんそう。
本当の所どうなの？
食ってけるの？楽しいの？
農業やっている人ってどんな事を考えてるの？
農業の世界に興味をお持ちの方
都会で暮らしていると気付かない事
自然と生き物を相手にする生活
田舎のじいさん、ばあさんとの付き合い
農薬や食品の安全のこと
等々、三重県で活躍する若手農業者たちが、ぶっちゃけ本音トークで語り合いました。

会場からの声も拾い上げながらすすめ「農業」について感じている「どうなんだろう？」という疑問をぶつけてもらうというものです。農業を語る事は都会と田舎、人と自然、作る人と食べる人、老若男女をつなぐ、そんな試みです。

きっとこれからの時代のあり方について新しい発見やヒントがありますよ！三重というローカルな地域で周囲を巻き込んで全力で突っ走る若き農業者たちだからこそ見える日本の農業、地域社会の課題と展望、そして夢。

三重の地から日本へ、そして世界へ！と自己評価の達人になるのではなく、他己評価いただけることが大事→誰に評価されたいか？→ＴＯＫＹＯの人、そう言った流れで三重テラスにて開催されたそうです。

そんな活動をしているmielさんが２か月に一度、伊賀、鈴鹿、桑名、津、松阪、伊勢志摩、鳥羽、東紀州などで体験型の研修をされていて、自分の営農以外の見学に触れることを大切にしたい「イベント」として開催していることを知り、希望者が集まって、例会に参加させていただくことになりました。

≪三重の事例報告について≫

私は、４月の鈴鹿の例会に参加させていただいて、まず、彼らの熱いメッセージに思わず感動！

三重にも、こんなに若くてエネルギッシュな農業生産者がいるんだなと嬉しく思いました。

午後からはトマトの圃場見学をさせていただいて、圃場の広さ、品種、設備、育て方も、土作りからされている方、水耕栽培にトライされている方など、個人の思い入れと共にこだわりを持ちながらも、各々の問題点を話し合って、少しでも良い方法が見出せないかと問題解決に向けてみんなで話し合われている様子でした。

地域懇談会からの参加者は、ほんの数名でしたが、初顔合わせをさせていただきました。

６月の桑名での例会にも２回続けて参加させていただき、美味しい炭焼きうな重をいただいて、食い逃げではありませんが、午後からのトマト部会は遠方のため、お先に失礼させていただいて、彼らの商品を販売している直売店にお邪魔して買い物させていただきました。（苦笑）

その後、１０月頃だったでしょうか、三重大教授２名とコープみえ職員２名と、なぜか、私一人の参加で「うれし野アグリ株式会社」（浅井農園と辻製油と三井物産が手を結んで、工場の排熱・余剰蒸気を再利用するガラス温室のある、共同出資したハイブリッドファーム）の植物工場へ出かけ、見学させていただきました。

そして、1月３１日、因みに私の誕生日ですが、三重大学で『みえ次世代農家トークバトル』を６０名の参加で開催、若手農家の取り組みを知ることで本音が、み・え・る。４名の方に農業の役割、将来の方向性についての考えなど語っていただき、皆さんから提供していただいた野菜の数々を使った料理に舌鼓を打ちながら交流させていただきました。

彼らが丹精込めて育てた野菜や瓶詰などの即売会も売り切れ続出で好評でした。

かりんとうは名古屋での会議に持参してみんなで美味しくいただきました。

「サノ・オーキッド」（洋蘭生産者 佐野拓也さん）の蘭も申し訳ないほどの超破格値で、自分の誕生日祝いに買って帰りましたぁ～！

帰宅後「お疲れ様でした！」とＦＢ（ファイスブック）でアップさせていただき、ＦＢ仲間にmielさんの紹介と共にシェア、「いいね！」してネ～って・・

総会にも出かけられなかったので、三重テレビ「ゲンキ！みえ！～生き活きリポート～」でＯＡされましたので視聴させていただき、この原稿の確認と追加取材のため、石本さん、浅井さんなどとmielのＨＰ（ホームページ）、ＦＢ（ファイスブック）に再度アクセスして依頼しました。

石本さんは三重県の最南端の紀宝町にお住まいで、地域の方々とも交流されていて、道の駅「ウミガメ公園」の副社長兼駅長も務められています。

石本果樹園では、およそ４０種類のみかんを栽培されていて、少量・多品種生産が方針&売りでもあり、「“甘夏”などの昔からある皮が厚くて手で剝けないみかんもつくっています。お金にはあまりならないんですが、お客さんが“石本さんのところだったら、きっとあるだろう”と電話をかけてくれるので、“ありますよ！”って答えたくて、つくっています。」ですって！

農家の三代目を継がれたキッカケは、彼が中学生の時、大事な果樹園が台風１９号で被害にあった時だそうで、心配してくださった、お客さんから励ましの手紙やパンなど支援物資をたくさん送っていただいた時に、“うちはたくさんの方に気にかけてもらえる仕事をやっているんだ”と実感。「お世話になっている店が、もし災害に遭った時、自分も同じことが出来るだろうかと考え、農業やものづくりをやっていきたいと思ったんです。」

なんて心温まるお話でしょう！

ＨＰには明るい笑顔の子どもさんたちが生き生きと楽しそうにされている姿をアップされていて癒されますよ～

若い力は素晴らしい！ネット通販なども取り入れて持続できる農業を実践されています。

≪三重の事例報告について≫

個々の力をmielメンバーと共に相談し、切磋琢磨して各自の取り扱っている商品に活かせることを見出してすすめられています。

農家の跡取りではなく脱サラ組もいる様ですが、三重の農業が徐々に変化しつつあるようで、新たな希望の陽射しが降り注いでいるような・・

そんな彼らの一生懸命さに心を打たれ、一消費者として何かお手伝いが出来たらと、ＦＢで紹介、「いいね！」を広げて、購入者が増えると良いなぁ～と思っています。

mielのメンバーは浅井会長が活動方針、コミュニティーの必要性を感じ、一人ひとり一本釣りされたというのも驚き！

三重県東西南北のいろんな農家が集まって結成されたとの旨・・

「うれし野アグリさん」の房どりミニトマトは生協の月１回商品案内に掲載されています。

ぜひ一度お試しいただきたいなと思います。

私の友人の果樹園では彼が地域の一番の若手だと言い、先祖からの農地を守っているだけで精一杯。逆に栽培本数を減らして、夫婦二人で頑張っている。労力に見合わない、生活ギリギリの収入、そのうちイノシシやカラスの被害が始まれば、もう手に負えなくなるだろう！なんて・・

昔に比べれば、夫婦二人なので、地域の温泉に出かけたり、一緒にゆっくりと過ごす様になって良かったのかもと話す背中は、やはり寂しそう～

Miel の生産物

息子さんに跡を継いでもらえないというよりは、大変さを分かっているだけに、継いでもらわなくても良いと考えている実情なので、少しでもお役に立てればと実家や親戚、友人に話しかけて僅かですが収入源確保のお手伝いをさせていただいています。

地域性にもよるのでしょうが、mielさんのノウハウが生かせる何かがあれば！なんて考えてしまいます。

高齢化が進む中、若者たちの団結力で次世代ファーマーズmielの日射しを三重県内津々浦々・・

いいえ、日本そして世界へと降り注いでもらえたら嬉しいなと願うこの頃です。

≪編集後記≫

２月７日に行われた、第１１回東海フォーラムでの内容に焦点をあてて編集作業をはじめて６か月。慣れない編集作業に加えて、今回は４人の編集委員が実践報告のあった地域、事業所を訪問し追加取材しました。そして、特集のテーマを「地域課題の解決にむけての新しい連携」としました。具体的事例からその内容を読み取っていただければ幸いです。

加えて、この６か月間での世相の大きな変化のひとつは、戦後７０年目にして日本の平和を脅す事態が急速にすすんでいることです。

いま、わたしの手元にある「新協同組合とは～そのあゆみとしくみ～」（１９９６協同組合経営研究所刊）の中に次のような記述があります。

「第一次世界大戦のいまだかつてない破壊のあとにたった協同組合の人たちは、旧約聖書の『大洪水』を世界大戦に、『神との約束』を不戦の誓いに重ねあわせて、戦争の惨禍から新しい人類社会をつくりなおそうと平和と協同の願いを、『約束の虹』（旧約聖書の説話にでてくる、大洪水のあとで人間におくられた神の約束の象徴としての虹）に託して協同組合のシンボルとした。」（１９２４年、ベルギーのゲントで開かれた第１１回国際協同組合大会で虹の旗を各国共通の旗とした。）

反戦・平和は、協同組合自身の大きな課題として追及し続けなければならないとの思いを、今つよくしています。　　編集委員　仲田伸輝

編集委員

下里玉美（尾張地域・コープあいち理事）
田所登代子（三河地域・コープあいち理事）
野田妙子（三河地域・研究フォーラム食と農、職員世話人）
飯村初美（三重地域・研究フォーラム食と農、環境、地域福祉世話人）
熊﨑辰広（岐阜地域・研究フォーラム地域福祉世話人）
田中義二（愛知書房・研究フォーラム食と農世話人）
仲田伸輝（研究フォーラム地域福祉世話人）
橋本吉広（大学非常勤講師）
向井　忍（専務理事）

（※研究フォーラムの地域福祉は「地域福祉を支える市民協同」、職員は「職員の仕事を考える」の略です）

【「地域と協同」の発刊について】

増刊・研究センターＮＥＷＳ「地域と協同」は、地域と協同の研究センターの活動の広報だけでなく、東海地域の市民の協同と協同組合や会員の願い、要求などに関するテーマを持った、研究的な掘り下げを行う情報交換の場、そして、様々な市民や実践家、研究者の方の意見や問題提起が発信されるものを目指しています。　（２０１３年７月６日　理事会決定より）

２０１５年８月２５日発行（不定期刊）

発行　特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター
代表理事　西　川　幸　城
〒464-0824　名古屋市千種区稲舟通１－３９　生協生活文化会館　２Ｆ
TEL　052-781-8280　FAX　052-781-8315
E-mail:AEL03416@nifty.com　　HP　http://www.tiiki-kyodo.net/

頒価３００円